

秋田県内出土の墨書土器、篋書・刻書土器

高 橋 学

はじめに

1995年2月25・26日、第21回古代城柵官衙遺跡検討会が仙北町を会場に開催された。折しも本年度は弘田柵跡の調査を開始してから20年の節目にあたり、これを記念して秋田県弘田柵跡調査事務所が検討会を招致したものである。会2日目には「弘田柵跡発掘20年の成果から一城柵研究の新たな視点を求めて」と題する特集が組まれた。このなかで筆者も「横手盆地の文字資料について」発表の場を与えられた。ここでは、横手盆地に所在する弘田柵跡をはじめ、集落遺跡、生産遺跡出土の文字資料のうち墨書土器、篋書・刻書土器に着目し、その分布・出土状況を再検討の上で報告を行った。特に弘田柵跡外郭南門周辺で検出された墨書土器等を埋納した土坑については、「南門廃絶時の祭祀遺構」ではないか、との想定も発表した。

検討会での発表は、筆者がかつて本研究紀要第1号に「秋田県内出土の墨書土器集成」を上梓したことが遠因となっているようである。あれから10年を迎え、再集成、再検討の模索は続けていたものの、もう一步が踏み込めず今日に至っている。今回の発表、これに先立つ発表資料の作成を通して、ようやく重い腰を上げ、全県を視野においた新版、改訂版を執筆することにしたものである。小稿は、県内における墨書土器、篋書・刻書土器を出土した遺跡を集成し、その分布・出土状況を再検討、整理を主眼とする。

1 再集成にあたって

前回の集成は、1985年までに出土した墨書土器を対象にしていた。今回は新たに篋書土器、刻書土器も集成に加え、前回の筆者の責による引用漏れを含め、1994年までの資料を掲載する。対象とする標記の土器を小稿では次のように規定しておきたい。

墨書土器：文字や記号、絵画などの墨書された土器

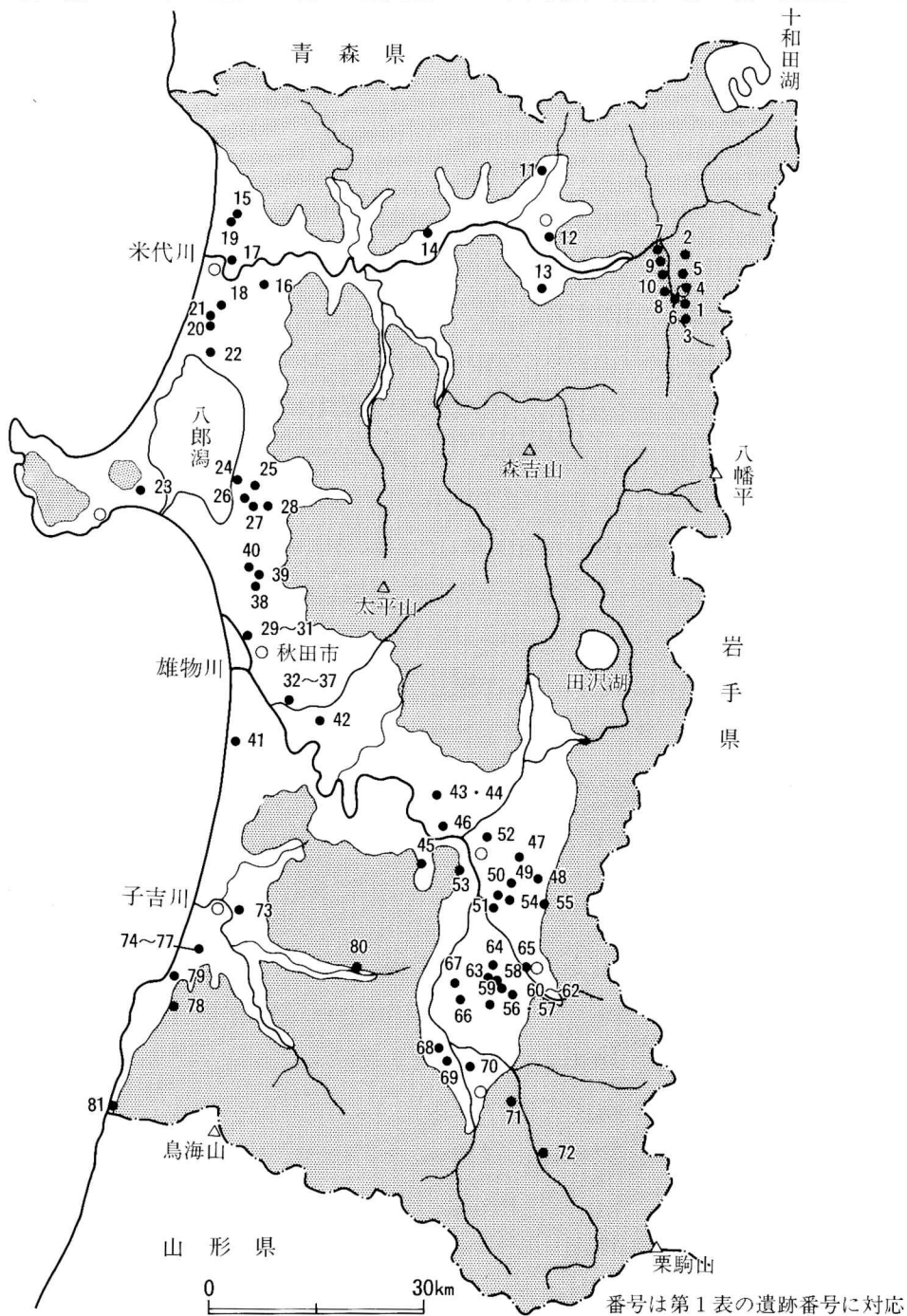
篋書土器：土器の焼成前に刀子等の篋状工具を用い、文字・記号、絵画等を器面に刻したもの

刻書土器：土器の焼成後に刀子等の篋状工具を用い、文字・記号、絵画等を器面に刻したもの

なお篋書と刻書は、その識別が困難な場合もあり、筆者が実見し確実に刻書であると判断した土器は横手市富ヶ沢B窯跡出土の2点のみである。⁽¹⁾

2 墨書土器、篋書・刻書土器出土遺跡一覧

秋田県における当該土器を出土した遺跡を一覧する。81遺跡で約2430点の資料を収集できた。墨書土器だけでも63遺跡から約2290点出土しており、前回の集積の約1.9倍の出土量となる。



第1図 墨書土器、篋書・刻書土器出土遺跡位置図

第1表 墨書土器、箆書・刻書土器出土遺跡一覧

番	遺跡名	所在地	墨書(●)・箆書(○)・刻書(⊖)	点数	文献・備考
1	一本杉	鹿角市花輪	(●)八万、寺、全、い _カ 二 _ヒ (○)井	6 1	1 2
2	小平	鹿角市花輪	(●)日願 _カ 、寺 _ヒ	5	1
3	歌内	鹿角市花輪	(○)× _ヒ	3	3
4	案内Ⅲ	鹿角市花輪	(○)大、十 _ヒ	3	4
5	下乳牛	鹿角市花輪	(○)ナ	1	5
6	中花輪	鹿角市花輪	(○) (絵画 _カ)	2	6
7	神田	鹿角市十和田上屋敷	(●)十万 _カ (○)大	1 1	7
8	堪忍沢	鹿角市花輪	(○)	1	8
9	太田谷地館	鹿角市花輪	(○)×	1	9
10	用野目川向Ⅲ	鹿角市花輪	(●)	1	10
11	粕田	大館市花岡町	(●)	1	1
12	山王台	大館市柄沢	(○)Ⅱ	1	11
13	谷地中館	比内町谷地中	(○)十	2	12
14	胡桃館	鷹巣町綴子	(●)守、寺 _ヒ	4	1
15	中田面	峰浜村板形	(●)万 _ヒ	3	1
16	大館	能代市田床内	(●)大 (○)×、ヲ→可 _カ	1 2	1 13
17	真壁地	能代市真壁地	(●)山	1	1
18	上の山Ⅱ	能代市浅内	(●)川	1	1
19	重兵衛台Ⅱ	能代市板形	(●)大	1	1
20	福田	能代市浅内	(●)大 (○)	1 1	14
21	十二林	能代市浅内	(○)ⅢⅢ	2	15
22	館の上	八竜町鶴川	(●)仟 _ヒ 、(○)	10～	調査中
23	小谷地	男鹿市脇本富永	(●)主、雄、○、十、大、高、田、福、 主厨、秋田、十人、里雄、上、五 _ヒ (○)井、× _ヒ	(168) 3	1、16
24	蒲沼	八郎潟町蒲沼	(●)兮	1	1
25	石崎	五城目町大川	(●)	1	17
26	下村	井川町北川尻	(●)有 _ヒ	2	1
27	飛塚1	井川町坂本	(●)伴	1	1
28	天神?	井川町天神?	(●)	1	1

番号	遺跡名	所在地	墨書(●)・竊書(○)・刻書(☉)	点数	文献・備考
29	秋田城跡	秋田市寺内	(●)厨、大、上、官、寺、中、中食、 厨上、秋田、井、主、政、軍穀所 [㊦]	1404	1、18
			(○)山本、内、丈、×、+、キ [㊦]	42	
	寺内山?	(秋田城跡か)	(●)高麗	1	1
	長者平?	(秋田城跡か)	(●)南	1	1
		(寺内雄物川河内)	(○)由川 [㊦] 田川 [㊦]	1	19
30	高野	秋田市寺内	(●)兄	1	1
31	後城	秋田市寺内	(●)家、足人	2	1
32	深田沢	秋田市上北手古野	(●)	2	1
33	湯ノ沢B	秋田市四ツ小屋	(●)	1	20
34	湯ノ沢F	秋田市四ツ小屋	(○)夫→夷 [㊦]	1	21
35	下堤C	秋田市四ツ小屋	(●)全 [㊦]	1	22
36	地藏田A	秋田市四ツ小屋	(●)	1	23
37	地藏田B	秋田市四ツ小屋	(●)千 [㊦]	1	未報告
38	下新城	秋田市下新城	(●)明→明、申	2	1
			(○)内杯	1	19
39	山崎	秋田市下新城小友	(○)川	1	24
40	待入Ⅲ	秋田市金足片田	(●)主、大 [㊦] 久 [㊦]	3	25
41	羽川	秋田市下浜	(●)入	1	1
42	松木台Ⅲ	河辺町松測	(●)王	1	26
43	上雨堤	西仙北町土川	(●)	1	27
44	半道寺?	西仙北町土川	(○)神代	1	19
45	桧山腰窯跡	南外村大畑	(○) 刻文・押印が23点報告		28 (中世)
46	大浦沼?	神岡町神宮寺	(●)公	1	1
47	払田柵跡	仙北町払田 千畑町本堂城回	(●)厨、官、舎、上、中、安、缶舎 小勝、懺悔、大津郷、廳、館、千 [㊦]	311	1、29
			(○)×、十、一 [㊦]	10	
48	内村	千畑町千屋	(●)厩 [㊦]	1	1
49	羽貫谷地	千畑町畑屋	(●)	1	個人所蔵
50	怒	大曲市藤木	(●)伴、六、福、富、仙、大、足 [㊦]	(36)	1
51	藤木	大曲市藤木	(●)伴、田、(浜) [㊦]	(37)	1
52	高関?	大曲市四ツ屋?	(●)郷	1	1
53	成沢	大曲市大曲西根	(●)	1	1
54	石名館	六郷町六郷	(●)田、(鳥の絵)	2	30

凡例1 墨書等の文字種の欄は、基本的に原字で記す。判読不能の文字も字形を表記した。
「→」は、文字が異体字と考えられる場合、→の次に原字を示す。

番号	遺跡名	所在地	墨書(●)・窠書(○)・刻書(⊖)	点数	文献・備考
55	鎧ヶ崎周辺	六郷町六郷東根	(●)他	2	31
56	中藤根	平鹿町中吉田	(●)長	1	1
57	下藤根	平鹿町中吉田	(●)七	2	1
58	竹原窯跡	平鹿町上吉田間内	(●)継	1	32
			(○)三、×、十、井、工	10	(1点は中世)
59	上猪岡	横手市猪岡	(○)十、(帆掛け船状)	2	33
60	富ヶ沢A窯跡	横手市赤坂	(●)一	1	34
			(○)	1	
61	富ヶ沢B窯跡	横手市赤坂	(○)建万呂餅、智光餅、山、所、 美、十	14	35
			(⊖)字	2	
62	田久保下	横手市赤坂	(○)×	2	36
63	オホン清水北	横手市塚堀	(●)	1	1、37
64	手取清水	横手市清水町新田	(●)蛭、占、王、井、弓、鳥麻呂、 主、千、連、伴、日、祢、石	132	38
			(○)工	1	
65	大鳥井山	横手市大鳥町	(○)君	1	39
66	石塚	雄物川町会塚	(●)(内外面に19文字)	1	1
67	大見内	雄物川町薄井	(●)嶋、崋	4	1
68	城神巡り	羽後町土館	(●)浄、赤麻呂、鎮、若、千万	24	1
69	柏原古墳群	羽後町大久保	(●)真	2	40
70	野尻	湯沢市八幡	(●)	1	1、個人所蔵
71	取上石山	湯沢市山谷	(○)	1	41
72	稲庭城跡	稲川町稲庭古館	(●)ネ／旬	1	42 (江戸期)
73	上谷地	本荘市土谷	(●)月、友、厨	6	43
74	客殿森	西目町西目	(●)酒下	1	1、44
75	井岡	西目町西目	(●)三、人、丈、井、主、羽、井岡、 女、中、大	73	1、44
			(○)×、十	3	45
76	井岡西	西目町西目	(●)中	3	44
77	中谷地	西目町沼田	(●)上	1	個人所蔵
78	下岩ノ沢	仁賀保町馬場	(●)	1	1、46
			(○)土	1	
79	立沢	仁賀保町立沢	(●)○	6	1、47
			(○)×	2	
80	宮ノ前	東由利町法内	(●)方	1	48
81	カウヤ	象潟町小砂川	(●)	2	1、49

凡例2 「／」は、複数の文字が記されている場合、その部位・位置などから、連続した一文と認め難い時に間に／を入れている。

3 出土状況からみる墨書・箆書・刻書土器

本項では、当該土器を出土した遺跡の概要とその出土状況に言及する。さらに土器の時期についても明記したい。なお、前回の集成時にも同様の項目を設け出土状況等についての記載を行っている。ここでは前回報告し、その後変更等の認められない遺跡については省略させていただく。これは第1表の文献の欄に1、すなわち前回集成の文献番号のみ記されているものである。河川流域単位でまとめ県北から順に記す。

(1) 米代川中・上流域(鹿角市・大館市・北秋田郡)

本地域では、米代川上流域の鹿角市10遺跡、大館市2遺跡、比内町1遺跡、同中流域の鷹巣町で1遺跡に分布が確認できる。鹿角市では①米代川右岸域で6遺跡あり、標高200～220m程の高位段丘上に立地する遺跡(一本杉、小平、歌内、案内Ⅲ)と標高130m台の沖積地あるいは低位段丘上に立地する遺跡(下乳牛、中花輪)に分けられる。②同左岸域は西山と呼ばれ、標高160～200m程の段丘・台地上に4遺跡が立地する。

①米代川上流域右岸の遺跡

一本杉遺跡(第10図1)

1981年に発掘調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡9軒(以下住居跡とする)、掘立柱建物跡3棟(以下建物跡とする)、中世の住居跡、張り出しをもつ竪穴遺構などが検出された。文字資料は、墨書土器6点、箆書土器1点がいずれも平安時代の住居跡より出土している。墨書は3軒の住居内(埋土)から各2点ずつ得られており、土師器坏体部(正位)に「寺」「八万」「全」「||かいカ」などと書かれている。箆書は、S I 014住居カマド脇床面より出土した須恵器長頸壺の頸部に「井」と記される。なお、「八万」「全」の墨書を検出したS I 012には擦文土器甕も伴出している。土器の年代は10世紀代と想定する。なお、前回の集成時に報告したが、小平遺跡でも「寺」の墨書土器が出土している。

歌内遺跡(第10図2・3)

1979・80年に発掘調査が実施され、縄文時代中期の住居跡、土坑、平安時代の住居跡49軒、土坑、中世と考えられる建物跡、柱列などを検出した。箆書土器は3点確認されており、いずれも平安時代の住居内出土である。2は須恵器壺頸部に「×」(S I 001)、3は須恵器長頸壺胴上半部に「T」形(S I 015)、もう1点は土師器甕底部(木葉痕)に細かい線刻(S I 034)がそれぞれ見られる。時期は10世紀後半を中心とすると想定しておく。また遺構外出土で、扁平な自然礫に「×」状の線刻、長さ4.5cmの小石に「佛日カ」の墨書が記される資料も報告されている。後者は経石とも考えられる。

案内Ⅲ遺跡(第10図4・5)

1981年に発掘調査が実施され、縄文時代前期・後期の住居跡、土坑などと共に平安時代の住居跡13軒が検出された。籀書土器は3点確認でき、いずれも住居内出土である。4・5はS I 010出土で、4は土師器甕頸部に「十」、5は須恵器長頸壺頸部に「大」と記される。もう1点はS I 019出土であり、須恵器長頸壺の頸部に籀書が見られるが判読不能である。なお、S I 010は焼失家屋であり、土器類、鉄製品と一緒に炭化した米・豆類が多量に出土し、「炭化米については、曲物に入った状態、おにぎり状に固結した状態」で検出されている。年代は、土器組成において環類が殆ど見られないことから、上限を10世紀後半と想定する。

下乳牛遺跡（第10図6）

1980年に発掘調査が行われ、平安時代の住居跡2軒、土坑などを検出した。籀書土器はS I 01住居カマド内出土であり、土師器甕の胴上半部に「ナ」形の線刻が認められる。同住居には、石帯、横櫛、皿形木製品（托か）など県内で類例の少ない遺物が含まれており、土器は37個体の土師器坏を始め、甕・鍋類、須恵器の坏が出土している。土師器坏の大部分は回転糸切りの後、体部下半にヘラケズリ調整が加えられる。住居内における大湯浮石層（十和田a火山灰）の床面直上までの堆積と、土器から9世紀後半を中心とする時期を想定できる。

中花輪遺跡（第21図170・171）

本遺跡の資料は、宅地造成のため、重機で表土を削平した際に出土したものである。2点の土師器甕には「土器内・外面に沈線を用いて文様を描き出」しており、絵画土器とでも称すべきものであろう。170と171は同一個体と思われ、170には格子目とシダ類植物あるいは羽状の文様が、171は「動物（馬または牛?）、植物、柵を想定させる文様が描かれる」。これらの土器について、文献6には「擦文土器と類似する」と記している。時期は10世紀代か。

②米代川上流域左岸の遺跡

神田遺跡（第11図10）

鹿角市十和田上屋敷にあり、米代川との比高差約25mの河岸段丘上に立地する。1973年に十和田高校社会科同好会による発掘調査が行われ、平安時代の住居跡1軒を検出し、土師器・須恵器が出土した。土師器のなかには墨書土器1点、籀書土器1点が含まれている。墨書は、内面を黒色処理した坏の体部（倒位）に報告では「方」か「天」と読んでいるが、添付の写真を見る限りでは、合わせ文字の「十万」のようである。籀書も坏体部（倒位）に記号様に「大」と記される。土器の時期は9世紀後半から10世紀前半か。

堪忍沢遺跡（第10図7）

1986年に発掘調査が行われ、平安時代の製鉄炉13基、住居跡6軒、竪穴状遺構、土坑などが検出され、鉄生産に係る集落であったと考えられている。籀書土器は、S K I 01竪穴状遺構内出土である。同遺構は一部が調査区外に及ぶため全体の規模・形態は明らかではないが、一辺

が1.8m程の方形を呈する小型の竪穴と想定される。須恵器長頸壺の頸部に「U」形の篋書が認められる。時期は10世紀中葉～末頃と思われる。

太田谷地館跡（第2次調査、第11図11）

1987年から2次(年)にわたる発掘調査が実施された。第1次調査では小さな舌状台地の基部に空堀を開削させ、その内側に竪穴住居などの施設を配する高地性防御集落が確認され、土器類の組成から11世紀代の時期を推定した。翌年の第2次調査では空堀の外側(台地中央寄り)から下限が10世紀中頃と考えられる住居跡等を検出した。時期想定は2枚の降下火山灰の堆積状況観察による。すなわち第2次調査検出の住居は十和田a火山灰降下後に構築され、廃棄の後に苦小牧火山灰の降下を迎えており、青森県内での後者火山灰の年代(10世紀中頃)を参考に⁽²⁾にしたものである。篋書は、第2次S I 150住居跡カマドの支脚として転用された土師器坏(非ロクロ)底部に記された「×」印である。底部はいわゆる砂底である。

用野目川向Ⅲ遺跡（第11図12）

1988年に発掘調査が実施され、縄文時代晩期の竪穴遺構、平安時代の住居跡4軒、土坑が検出された。墨書土器は、S I 01住居跡床面付近出土である。土師器坏(ロクロ使用)の体部に記される。時期は堪忍沢と同時期か。

③大館市・比内町の遺跡

山王台遺跡（第10図8）

大館市柄沢にあり、米代川右岸の標高78m前後の段丘面上に立地する。1988年に発掘調査が実施され、平安時代の住居跡9軒、焼土遺構、柱列、溝跡等が検出された。篋書土器は1点確認されている。8は第7号住居跡床面上より出土した須恵器長頸壺であり、頸部に「||」状の篋書が記される。土器の時期は9世紀後半から10世紀初頭を想定している。

谷地中館遺跡（第10図9）

北秋田郡比内町谷地中にあり、沖積面に島状に残る独立丘上(標高約82m)に立地する。1971・72年と1976年の3次にわたる調査が行われ、平安時代～中世の住居跡、竪穴遺構などが検出された。篋書土器は1976年の第3次調査において2点確認されている。2点とも須恵器甕の肩部から頸部にかけて「十」と記される。1点はカマドを持たない竪穴住居(S I 03)出土であり、もう1点は遺構外出土である。平安時代の土器の年代は10世紀後半から11世紀か。

(2) 米代川下流・沿岸域(能代市・山本郡)

本地域では、能代市6遺跡、峰浜村、八竜町各1遺跡が知られる。能代市の大館、重兵衛台Ⅱ、福田の3遺跡では各1点ずつの墨書土器が出土しているが、そのいずれもが「大」と墨書されている。

①大館遺跡（第11図13・14）

能代市田床内にあり、米代川下流域左岸の標高40～45mの台地平坦部に立地する。本遺跡は『日本三代実録』に登場する「野代宮」、いわゆる元慶の乱（878年）の際の政府軍の最前線基地の疑定地とされている。1971年から6次にわたる調査が行われ、土塁・空堀・柵列の区画施設と内部に住居跡等が検出されている。出土遺物から9世紀後半を中心とする時期を想定できるが、ここが「野代宮」跡であるのか否かは明らかではない。文字資料は、墨書土器1点、籀書土器2点が、いずれも遺構外より出土している。墨書は第3次調査9区で土師器坏体部（倒位）に「大」と記され、籀書は、同10区で土師器小壺胴上半部に「×」、第4次調査13区では土師器坏体部に「ㄗ」形、底部にも「一」と記される。「ㄗ」は報告書では「可の略字体かと思われる」としている。

②能代市沿岸域の遺跡

ここでは、能代市浅内に所在する福田遺跡、十二林遺跡を取り上げる。両遺跡とも成合台地と称される海成段丘上（標高約20～40m）に立地し、1987年に高規格道路建設に伴う発掘調査が行われている。

福田遺跡（第11図15・16）

平安時代の住居跡19軒、建物跡7棟、土坑、溝跡、柱列などが検出された。本遺跡は、板塀あるいは垣根などによる区画施設を有する集落跡であることが明らかとなっており、土器から9世紀後半を前後する時期に存続したと想定している。文字資料は墨書土器1点、籀書土器1点出土している。墨書はS I 23住居に隣接するS N24焼土遺構出土であり、焼土内より倒立状態で検出された。土師器坏体部（正位）に「大」と書かれる。土器が原位置を保つものであるとすれば、文字は逆さまに見えることになる。また籀書は、S I 57住居跡埋土上位出土であり、須恵器長頸壺頸部に記している。欠損しており判読不能であるが、土器を倒立させて横画3本引いた後に1本の縦画を引いている。

十二林遺跡（第11図17・18）

福田遺跡の北約1kmに位置する。調査の結果、縄文時代の土坑・Tピットと平安時代の住居跡12軒、建物跡5棟、土器焼成遺構14基、土坑96基、柱列と製鉄炉2基、須恵器窯跡1基、炭窯1基などが検出された。集落の存続時期は9世紀後半から10世紀代と想定されるが、下限は明確ではない。本遺跡も福田遺跡同様に板塀あるいは柵列による区画施設をもつ集落であり、更に鉄生産、土師器・須恵器生産を生業としていたことも判明している。ここでは籀書土器が2点出土している。2点とも住居内出土であり、1点はS I 94出土の須恵器壺胴部に「||||」と正位状態で上から下へ4本の線が引かれる。もう1点はS I 100出土であり、土師器の坏あるいは小型の甕に籀書が見られる。小破片であるが、横5本、縦1本の線が引かれている。

また福田遺跡の南方約3.5km、成合台地南端に位置する八竜町館の上遺跡は、縄文・弥生・平安時代の複合遺跡である。1993年より3次にわたる発掘調査が計画され、1994年で第2次調査が終了している。報告書は第3次調査終了後に刊行予定であり、現在遺物等の整理中である。ここでも10点以上の墨書土器、箆書土器が出土しており、4点には「仵」と墨書されている。

(3) 八郎潟周辺地域（男鹿市・南秋田郡）

本地域では、井川町3遺跡、男鹿市、八郎潟町、五城目町各1遺跡が所在する。小谷地遺跡は、前回の集成時にも墨書文字の一覧等を行っているが、その後秋田県立博物館において同遺跡の墨書土器を再整理し、研究報告にまとめており、今回これら成果を加えて再報告する。

①小谷地遺跡（第2図、第11図19～27）

男鹿市脇本富永にあり、日本海に程近い標高約12mの沖積面に立地する。1964年から1981年にかけて4次の発掘調査が実施され、県内では類例の極めて少ない古墳時代（5世紀代）と平安時代の埋没家屋が検出されている。墨書土器は、約170点確認されており、発掘調査以前に採集された資料を除くと、1～3次調査における平安時代の埋没家屋近辺から「密集した分布状態で」出土している。すなわち1次調査では約10㎡の範囲内から47点が、3次調査では約30㎡⁽³⁾の範囲内から107点の墨書土器が検出されている。

『秋田県立博物館研究報告』に掲載された三嶋・庄内氏による「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」には、判読可能な115点の墨書土器が図示され、墨書の見られる土器の分類、文字や記号の特色、土器と墨書の関連等について分析を行っている。判読された文字は調査報告時の読み



第2図 小谷地遺跡の調査区位置と検出遺構・遺物

と異なるものもあり、以下に新たに文字種を一覧する。また同書で灰釉陶器に墨書された例（底部に「福」、27）を公にした。灰釉陶器の墨書は、県内では唯一例である。墨書土器の年代は9世紀中葉～後半と考えられる。

一方、箆書土器は第3次調査で3点出土している。報告では特殊須恵器として記載されている。2点は「底部に幅0.2～0.3cm、深さ0.2cm前後の「×」印を竹状のものでなぐり書きし」、もう1点は「底部から胴部にかけて細かい8本の線をもちい「井」印にきざみ込んでいる」。

一文字	主(43)、雄(17)、○(10)、十(9)、大(7)、高・田・五・上(2)、ネ・酒・廣・全・			
	里・伴・仙・矢・茅・本・禾・万・若・福・説・丈・慈・㊦(1)、女 _カ ・若 _カ (2)、本 _カ ・阪 _カ ・			
禾 _カ ・○ _カ (1)	二文字	主厨・秋田・十人・里雄(1)、十人 _カ (1)	箆書	×(2)、井(1)

②石崎遺跡

五城目町大川にあり、八郎潟東部の沖積地に立地する。1967年から3次にわたり発掘調査が行われ、柵列の一部と櫓跡と思われる柱痕などを検出している。本遺跡に対しては、創建期の秋田城跡、あるいは秋田郡衙跡との説などが示されているが、明確ではない。文献17によると、墨書土器は、発掘調査以前に用水路から「墨書のある須恵器皿」が採集されているようであるが、図・写真等なく詳細は不明である。

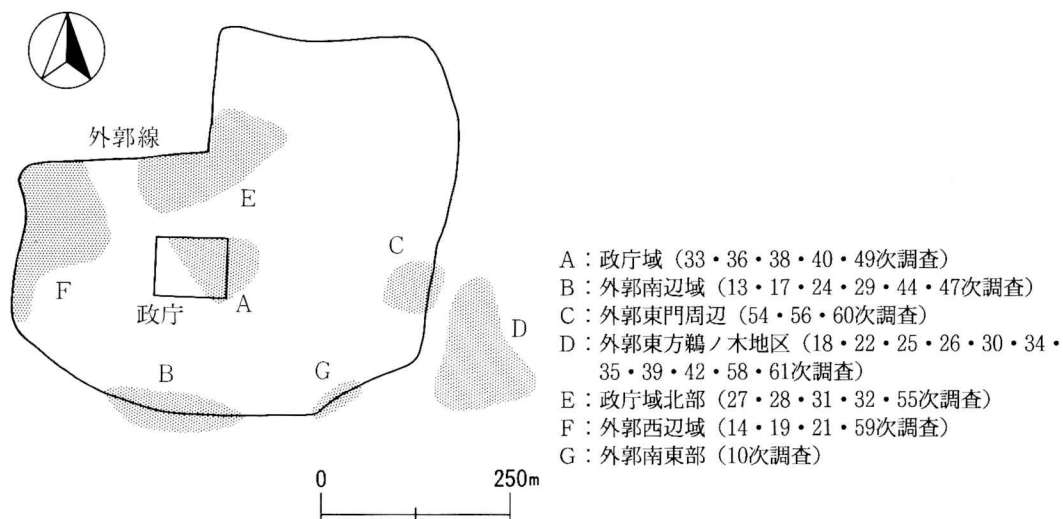
（４）雄物川下流域（秋田市・河辺郡）

本地域では、秋田市13遺跡、河辺町1遺跡が知られる。

①秋田城跡（第3図、第12～14図）

秋田市寺内にあり、高清水丘陵と称される海からの飛砂で覆われた起伏の大きい独立丘上（標高約30～50m）に立地する古代城柵遺跡である。1959年から4次にわたる国営調査を経て、1972年より秋田市教育委員会が継続的に発掘調査を行っている。これまで一辺約550mの不整形の築地塀による外郭線が確認され、東門も検出された。中心部、政庁も築地で囲まれ、その規模は南北が約77m、東西が約94mの東西に長い横長の形であることなどが明らかとなっている。ここに取り上げる資料は、国営調査分、表採遺物を含め、1994年の第62次調査分まで網羅している。墨書土器は1404点、箆書土器42点あり、県内の出土量の約60%を占めている。なお、秋田城跡調査事務所が1984年に発行した『秋田城出土文字資料集』⁽⁴⁾には1983年第38次までの墨書土器が集成され、649点が報告されている。第12～14図には、39次以降出土の資料を掲載している。

墨書文字は第3表のとおりであり、判読可能な文字は記号と思われるものを除き、一文字で177種、二文字で63種、三文字で21種となるようである。



第3図 秋田城跡における墨書土器出土地区

第2表 秋田城跡地区別特定文字の出土有無一覧

	A 政庁域	B 南辺部	C 東門周辺	D 鶴ノ木	E 政庁北部	F 西辺部	G 南東部
厨	○	○	○	○	○	○	×
大	○	○	○	×	○	×	○
上	○	○	○	○	○	○	○
官	○	○	○	○	○	×	×
寺	×	×	○	●	×	×	×
中・長・三	×	○	○	○	×	×	×
一	×	○	○	○	×	○	×
十	×	×	●	○	×	×	×
中食	×	●	×	×	×	×	×
道	×	○	●	○	×	×	×
井	×	○	○	○	○	×	×
秋田・田 山・政・下	×	○	○	×	×	×	×
佐	○	×	○	×	×	×	×
今	×	○	●	×	×	×	×
二	○	○	○	×	×	×	×
山・仁	×	○	○	×	×	×	×
岳	×	○	×	○	×	×	×
主	×	○	○	×	×	○	×
川	×	×	○	○	×	×	○

○ 出土例あり
 ● 集中的に出土
 × 出土例なし

墨書土器の出土地区を、A：政庁域（173点）、B：外郭南辺域（444点）、C：外郭東門周辺（472点）、D：外郭東方鶴ノ木地区（195点）、E：政庁域北部（31点）、F：外郭西辺域（18点）、G：外郭南東部（12点）の7地区に分ける。出土地点の明確な資料のうちの99%以上はこの7地区内に収まる。この中には文字以外の墨書である人面土器も含んでいる。出土は城外の鶴ノ

第3表 秋田城跡出土の墨書文字種一覧

一文字	厨(124)、大(28)、上(27)、官(18)、寺(14)、中(12)、長・一・十(9)、道・井(8)、佐・今・二・三・山・仁(7)、下・岳・政・主・田・川(6)、太・吉・日(5)、秋・金・成・真・石・工(4)、有・豊・所・国・信・御・火・年・門・正・七・貞・㊦・送→逆 _カ 蓮(3)、八・慶・牛・生・富・清・橘・玉・見・人・千・王・丈・徳・難・本・之・内・新・申・酒・福・木・刀・伊・丁・行・天・介・守・殿・出・浄・鎮・神・廳・物・司・花・万・*・㊧(2)、厨・田・田・半・常・造・丸・用・伯・食・飽・寸・左・廣・加・合・望・允・縣・繩・馳・足・府・鷹・水・倍・谷・宙・師・得・県・村・積・譯・瓦・入・次・矢・穴・友・我・驛・尻・諸・文・六・掾・叶・良・集・鳴・品・専・力・北・民・善・固・寶・最・件・和・處・閉・僕・化・予・室・示・家・永・宮・押・前・百・木・㊨・㊩→㊪・㊫・丕→至・个→箇・灾→災・弳→弴・師・楯・ ・、・イ・○・×(1)
	厨 _カ (14)、大 _カ ・十 _カ (6)、田 _カ ・酒 _カ ・生 _カ (3)、井 _カ ・上 _カ ・寺 _カ ・王 _カ ・方 _カ ・南 _カ ・正 _カ ・丸 _カ ・主 _カ ・浄 _カ ・代 _カ ・今 _カ ・海 _カ ・下 _カ (2)、㊬ _カ ・中 _カ ・六 _カ ・七 _カ ・佛 _カ ・繼 _カ ・慮 _カ ・衆 _カ ・盛 _カ ・福 _カ ・則 _カ ・伯 _カ ・慶 _カ ・諱 _カ ・佐 _カ ・館 _カ ・允 _カ ・権 _カ ・奈 _カ ・之 _カ ・川 _カ ・補 _カ ・至 _カ ・安 _カ ・平 _カ ・田 _カ ・得 _カ ・致 _カ ・刀 _カ ・入 _カ ・用 _カ ・水 _カ ・我 _カ ・可 _カ ・官 _カ ・廳 _カ ・津 _カ ・道 _カ ・分 _カ ・成 _カ ・口 _カ ・穴 _カ ・匠 _カ ・本 _カ ・西 _カ ・吉 _カ ・古 _カ ・出 _カ ・仁 _カ ・真 _カ ・友 _カ ・山 _カ ・手 _カ ・自 _カ ・木 _カ ・鹿 _カ ・人 _カ ・呂 _カ ・兄 _カ ・月 _カ ・集 _カ ・秋 _カ ・廷 _カ ・勢 _カ ・炊 _カ ・万 _カ ・× _カ ・雄 _カ →雄 _カ (1)、乗 _カ 棄 _カ (2)、史 _カ 吏 _カ ・口 _カ 日 _カ 己 _カ ・宮 _カ 官 _カ ・金 _カ 垂 _カ ・之 _カ 久 _カ ・+ _カ × _カ ・申 _カ 甲 _カ ・連 _カ 運 _カ ・掾 _カ 禄 _カ ・巳 _カ 日 _カ ・可 _カ 介 _カ ・井 _カ 廿 _カ ・曆 _カ 曆 _カ (1)
二文字	中食(8)、厨上・秋田(7)、秋田(→秋田 _カ)、酒所(5)、官厨(3)、行事・雄城→雄城・田川・田中・十万(2)、五万・九千・千一・十二・酒厨・客厨・政厨・政所・長罌→長岡・最上・河郡・下郡・梁田・山本・秋山・大伴・上門・上食・御酒・遊館・千山・案主・鎮所・成上・見官・杯一・仲村・毛十・舎人・佐人・十人・客人・山人・人長・百長・大平・主帳・中葉・中子・中四・方中・子九・能者・雜申・二隊・仕料・刑三・五月・権目・福万・巳寸・半人 _カ い _カ 送→逆 _カ 蓮(1)
	田 _カ ・所 _カ (4)、厨 _カ (3)、大 _カ ・中 _カ ・刀 _カ ・ _カ _カ (田人 _カ)(2)、官 _カ ・上 _カ ・石 _カ ・百 _カ ・役 _カ ・丈 _カ ・器 _カ ・驛 _カ ・山 _カ ・罌 _カ ・雄 _カ (城 _カ)→雄 _カ (城 _カ)・酒 _カ (所 _カ)・机 _カ (所 _カ)・政 _カ (所 _カ 厨 _カ)・中 _カ (葉 _カ)・子 _カ (葉 _カ)・水 _カ (取 _カ)・万 _カ (申 _カ 甲 _カ)・子 _カ (九 _カ)・鎮 _カ (兵 _カ)・ _カ (鎮 _カ)所・ _カ (梁 _カ)田・ _カ (庄 _カ)司・ _カ (仲 _カ)上・ _カ (人 _カ 火)伏・ _カ (田 _カ)中・ _カ 城・ _カ 成・ _カ 万・ _カ 京・ _カ 中・ _カ 開・ _カ 大・ _カ 貴・ _カ _カ (手 _カ)・ _カ (五 _カ) _カ ・ _カ _カ (所 _カ)・ _カ _カ (長 _カ)・ _カ _カ (厨酒 _カ)・ _カ _カ (厨戒 _カ)・ _カ _カ (御料 _カ)・ _カ _カ (弘 _カ)・ _カ _カ (政所 _カ)・ _カ _カ (日女 _カ)・ _カ _カ (十手 _カ)(1)
三文字	軍穀所(2)、官厨舎・下人給・月佐貢・主牛呂・難波太・味知 _カ (家 _カ 宋 _カ)・六郎 _カ (官 _カ)・大長 _カ ・方虫 _カ ・石上 _カ ・赤坏 _カ ・ _カ 厨舎・ _カ 見官・ _カ 大 _カ ・ _カ _カ (秋 _カ)介・一 _カ _カ ・ _カ 上 _カ ・ _カ _カ _カ (月内 _カ)・ _カ マ _カ ・ _カ 大何(1)
四文字以上	南見念花観花念、橘 _カ _カ (楨 _カ)椽 _カ 、 _カ 利乃 _カ _カ (初 _カ)、神 _カ 見 _カ 、 _カ _カ 六年二月十 _カ (日 _カ)良良 _カ (福 _カ) _カ (徳 _カ)、 _カ _カ 人 _カ _カ 、濱継一館、 _カ 部万呂
その他	人面土器、目玉の墨書、平仮名状のもの、世・赤の習書、墨絵・戯画 _カ など

木地区に限定され、特に沼沢跡を中心とする。墨書人面7点、坏に目玉を大きく描いたもの2点が出土している。墨書文字等と出土地区の関係を表に現すと第2表ようになる。

また第13図44～46は、外郭東門内側の54次調査区出土であり、調査概報では「佐」あるいは「有カ」と報告されているが、書体から「有」と判読するのが妥当と思われる。⁽⁵⁾

一方、籀書土器は42点確認しており、土器以外の円面硯（脚部に「山本」）や丸瓦にも認められ、ここに加えている。7地区別にその出土点数を見ると、A1点、B5点、C18点、D6点、E1点、F4点となり、その他は国営調査・城外勅使館地区（9次）各1点と外郭北東隅部（23次）の5点である。墨書とは分布比率が異なる。記入される内容は、「×あるいは十」の記号状のものが多く19例ある。次いで「一」（4）、「キ」（3）、「井」（1）なども記号のようであり、文字では、「内」（3）、「□〔湯カ〕マ鳥麻呂」、「山本」、「丈」が見られる。文字のうち「丈」以外は、全て54次調査区出土である。

また文献19によれば、「寺内雄物川河中」、おそらく秋田城西方眼下の雄物川内より籀書土器が採集されている。須恵器壺の底部に「由川圀」あるいは「田川圀」と籀書されているようであるが、拓本等載せられておらず詳細は不明である。

②御所野台地の遺跡群（第4図）

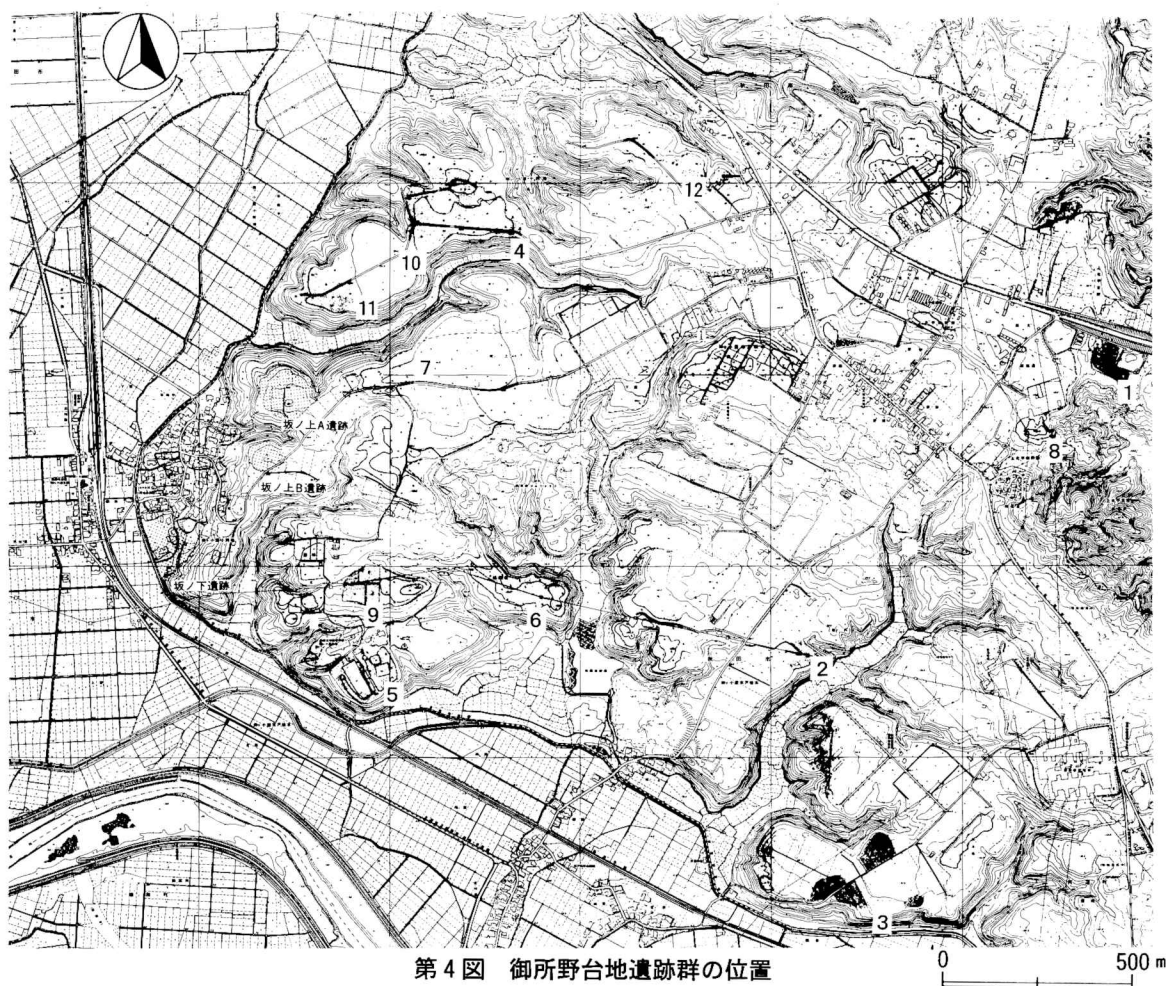
秋田市南郊の四ツ小屋・上北手にある、いわゆる御所野台地に立地する遺跡は、30箇所以上が周知され、新都市開発整備事業関係等に伴い発掘調査が実施された。文字資料が確認されたのは6遺跡あり、前集成で記載している深田沢遺跡を除く5遺跡を紹介する。資料は、各遺跡あたり1・2点ではあるが、いずれも住居跡、土壌墓等の遺構内出土であることに注目したい。なお土器の年代はいずれも9世紀第3四半期を前後する頃を考えている。

湯ノ沢B遺跡（第15図72）

台地の南東部に位置する。1982年に発掘調査が実施され、縄文時代中期の住居跡・土坑などと共に平安時代の住居跡が1軒検出されている。墨書土器は、一辺約4mの方形を呈する住居内出土である。須恵器坏底部に墨書が見られるが判読不能である。

湯ノ沢F遺跡（第5図、第15図73）

湯ノ沢B遺跡の南約600mの台地南端部に位置する。1983・85年に発掘調査が行われ、平安時代の土坑墓が40基検出された。籀書土器は3号土坑墓出土である。土坑は長軸3.56m、短軸1.26mの隅丸長方形に掘り込まれ、内部に幅0.7m、長さ2.7mの木棺の痕跡が確認されている。副葬品と考えられる遺物は、現長61.2cmの鉄刀、刀子、鉄鏃（30本以上）、馬具などの鉄製品と共に2個体の赤褐色土器坏が並んで正立状態で置かれていた。⁽⁶⁾鉄刀の切先方向から想定すると土器は被葬者の足元に置かれていたであろう。籀書は南側の土器底部に記される。「夷」の異体字「夫」ではないかと考えられている。⁽⁷⁾



墨書・籠書土器出土遺跡

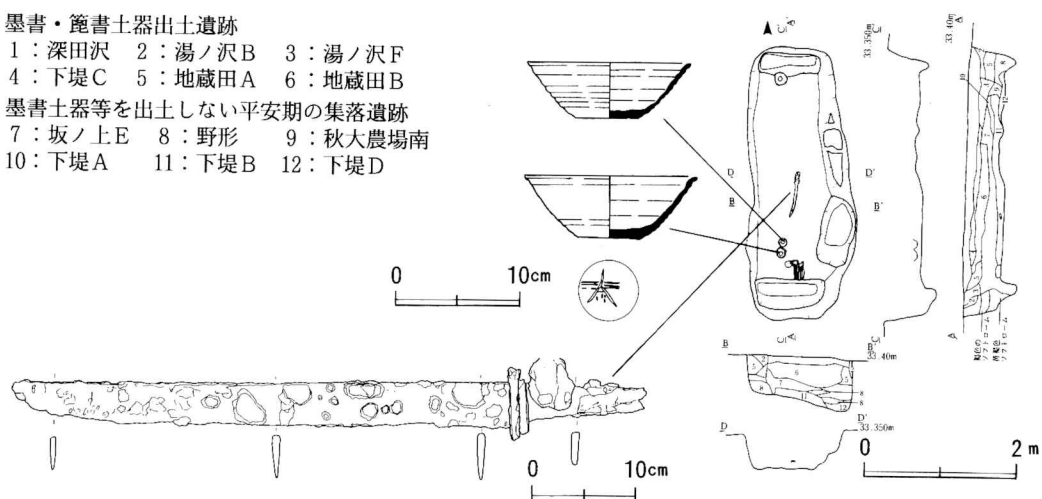
1: 深田沢 2: 湯ノ沢B 3: 湯ノ沢F

4: 下堤C 5: 地蔵田A 6: 地蔵田B

墨書土器等を出土しない平安期の集落遺跡

7: 坂ノ上E 8: 野形 9: 秋大農場南

10: 下堤A 11: 下堤B 12: 下堤D



下堤C遺跡（第15図74）

台地の北西部に位置する。本遺跡は1968年から1973年にかけて6次の調査がおこなわれた下堤遺跡の一角を占め、1972年の調査において初めて平安時代の住居跡が確認されている。その後、新都市開発に伴う1987年の調査で、平安時代の住居跡31軒、堅穴遺構8軒、土坑などが検出された。墨書土器は、8号住居跡床面出土である。赤褐色土器坏底部に「全カ」と記される。地蔵田A遺跡（第15図75）

台地南西端部に位置する。1992年に発掘調査が実施され、平安時代の住居跡4軒、建物跡3棟、土坑が検出されている。墨書土器は、3号住居跡覆土出土であり、赤褐色土器坏底部（半欠）に判読不能の文字が記されている。同住居は軸線を同一にとる2号建物跡との配置から両者が一体となった居住施設ではないかと想定できる。同様の例は、台地東端に位置する深田沢遺跡にあり、この遺跡でも墨書土器が出土している。

地蔵田B遺跡

地蔵田A遺跡の北東約400mに位置する。1985年の発掘調査により、柵木で住居群を囲む弥生時代前期の集落が検出されている。調査後に行われた土壌分析のためのサンプリング時に墨書土器が1点出土している。須恵器台付皿の底部に「千カ」と記される。土器は若美町海老沢窯産と想定される。

③秋田市北部の遺跡

下新城

文献19によると、下新城槻ノ木谷地出土の遺物として墨書土器2点、篋書土器1点が掲載されている。出土位置が明確ではないので、ここでは遺跡名を下新城としておく。墨書土器は現在土崎図書館所蔵であり、赤褐色土器坏体部（正位）に「明」（→明）、須恵器坏底部に「申」と書かれている。篋書は文献19に拓本が載せられており、須恵器台付坏底部に「内杯」と記されるようである。上新城中学校蔵とされるが、筆者は未確認である。

山崎遺跡（第15図76）

秋田市下新城小友にあり、標高26m前後の舌状台地上に立地する。1991年に発掘調査が行われ、10世紀代の建物跡、堅穴遺構、土坑などが検出され、掘立柱建物を主とする集落跡と想定される。ここでは遺構外（SB41建物跡近辺）より1点篋書土器が出土している。須恵器甕胴部上半部に「|||」状（縦3本の沈線）の篋書が見られる。

待入Ⅲ遺跡（第15図77・78）

秋田市金足片田にあり、標高20m以下の低丘陵端部に立地する。1991年に発掘調査が実施され、14～15世紀代の建物跡、火葬墓、井戸跡などと、9世紀後半の井戸跡が検出されている。建物跡は「地侍層の居館とする見解」が示されている。墨書土器は3基確認された9世紀代の

井戸跡周辺（遺構外）から3点出土している。3点とも須恵器坏に記され、77は「主」、78は「大□久」と底部に、もう1点は体部に墨書がある。

④河辺町の遺跡

松木台Ⅲ遺跡（第15図79）

河辺町戸島にあり、眼下に岩見川をのぞむ標高約40mの台地端部に立地する。1985年に東北横断自動車道建設に伴う調査が実施され、旧石器時代の石器（約3250点）、縄文時代中期の住居跡、晩期の土坑墓など、平安時代の住居跡1軒、土坑などが検出されている。墨書土器は遺構外より1点出土しているが、その位置はS I 105とした平安時代の住居跡周辺のようなのである。土師器坏底部に大きく「王」と記される。底部切り離しは静糸切りである。土器の年代は9世紀後半と想定する。

（5）雄物川中流域（大曲市・仙北郡）

本地域では、大曲市4遺跡、西仙北町・六郷町・千畑町2遺跡、南外村、神岡町各1遺跡と仙北町と千畑町にまたがる払田柵跡が知られる。

①仙北郡北部の遺跡

上雨堤遺跡（第15図80）

西仙北町土川にあり、標高33m程の低い台地上に立地する。1985年に発掘調査が行われ、6間×2間の建物跡、柱列、土坑などが検出された。墨書土器は建物と重複関係にある（新旧不祥）SK02土坑内出土である。須恵器坏体部に「𠃎」形の墨書が見られる。土器の年代は、報告書によると9世紀後半から10世紀前半頃と考えている。

半道寺？

江戸時代末期の紀行家菅江真澄が著した『月の出羽路（仙北郡二ノ下）⁽⁸⁾』には、現在の西仙北町半道寺の韭畠という古跡より出土した土器2点が模写されている。うち1点の底部には「神代」の篋書が認められ、同図には「こは祈年、新嘗に大神を祭る陶器なるよし」との説明⁽⁹⁾が加えられている。半道寺近辺で該期の遺物が出土しているのは、『秋田県遺跡地図（県南版）⁽⁹⁾』を見る限りでは上記の上雨堤遺跡のみのようであり、同遺跡あるいはその周辺の可能性もある。

大畑・松山腰窯跡

南外村大畑にあり、標高40m程の段丘西向緩斜面上に立地する。1991年に発掘調査が実施され、13世紀前半代の中世陶窯跡1基が検出された。本窯では壺、甕、片口鉢を主体に少量の碗、小皿、陶鍾、陶硯、五輪小塔なども生産している。出土遺物の中に、報告書によると23点の「刻文・押印」が認められる。「刻文」は直線の刻文、曲線の刻文、写実的刻文に分類し、写実的刻文は篋状器具による「鶴」を描いているが、明確に文字を記したものは無い。一方「押印」

は植物の葉（カエデ状のもの、シダ）、家紋（二重亀甲紋、亀甲花菱紋）、記号（円紋）がスタンプされている。

②払田柵跡（第6・7図、第16～18図）

仙北町払田、千畑町本堂城回にあり、仙北平野中央部の沖積地と、ここに独立丘状を呈する長森・真山丘陵を占地する古代城柵遺跡である。明治年間より埋木が発見されており、1930年に最初の発掘が行われ、翌年には秋田県初の国指定史跡に選定されている。1974年から払田柵跡調査事務所を設置し、以後継続的な調査が実施されている。これまで、外郭は角材列が東西1370m、南北320mの長楕円形に巡るが、創建時1期のみ造営であることが判明している。内郭は東西765m、南北320mの長楕円形で、石塁、築地土塀と角材列で囲まれる。外郭、内郭とも東西南北に八脚門が作られる。内郭内部、長森中央部には板塀で画された政庁が構築され、正殿を初めとする建物は5期の変遷が認められる。創建時期は、土器や年輪年代学の成果から9世紀初頭で確定し、終末は11世紀初頭と想定している。

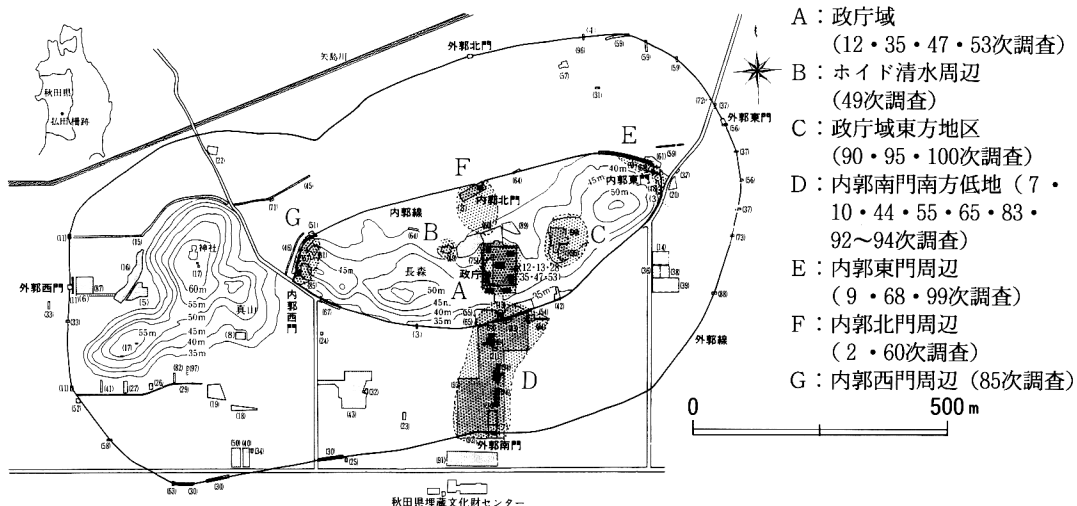
資料は、平成6年度第100次調査分まで含む。墨書土器311点、籀書土器10点確認されている。墨書は出土地点を大きくまとめると、A：政庁域（36点）、B：ホイド清水周辺（72点）、C：

第4表 文字種一覧および地区別特定文字の出土有無一覧

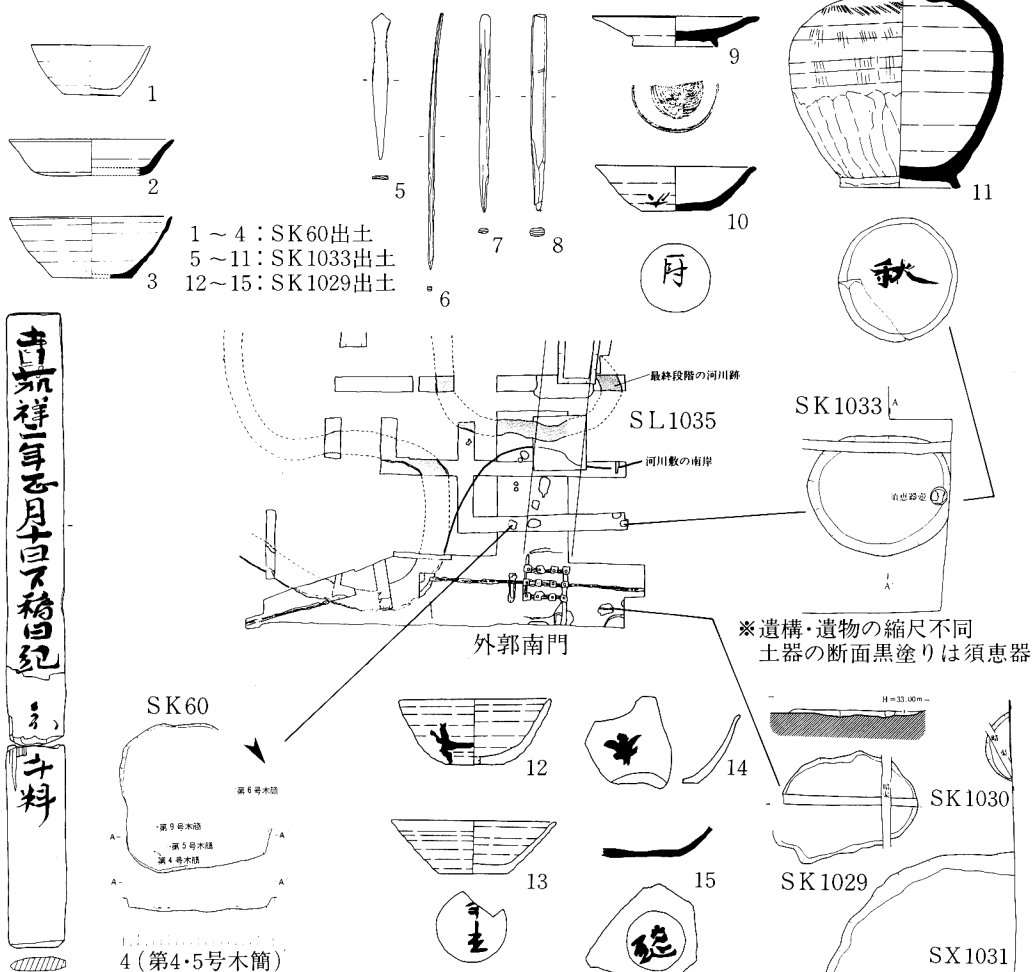
一文字	厨(41)、厨 _カ (3)、官(16)、官 _カ (1)、舍(9)、上(4)、中・安(3)、廳・館・千(2)、秋・矢・杯・坏・伴・左・文・方・名・仲・圓・繼・木・立・就・凡・車・春・工・山・内・主・犬・音・岳・賀・酒・七・生・成・全・前・長・⊙(1)		
	上 _カ (2)、蟠 _カ ・木 _カ ・友 _カ ・集 _カ ・凡 _カ ・十 _カ ・第 _カ 第 _カ ・官 _カ 臣 _カ (1)		
二文字	岳舍(6)、小勝(2)、懺悔・中大・音丸・厨家・厨□・□館・官□・余□(官 _カ)・官□(舍 _カ)・凡凡(則天文字か)・藤□・□(藤 _カ)借・□(鞍 _カ)大・利□(乙 _カ)・□□(日當 _カ)・□主・□平・力□・岳□・上□(1) ※岳は則天文字の「正」と思われる		
三文字	大津郷・鷹空上・千長□・□(政 _カ)所□(厨 _カ)	その他	習書(1)
籀書	×・一(4)、+・徳 _カ (1)		

	A 政庁域	B ホイド清水	C 政庁東方	D 南方低地	E 内郭東門	F 内郭北門	G 内郭西門
厨	○	○	○	○	×	×	×
官	○	○	○	○	×	×	×
舍	○	○	×	×	×	×	×
岳舍、岳□	×	○	×	○	×	×	×
上	×	○	×	○	×	×	×
中	×	×	×	○	×	○	×
安	○	○	×	×	×	×	×
他の主な文字	廳、犬賀、成	音、坏政 _カ 所厨 _カ	小勝、館鷹空上	小勝、秋繼、就	杯、圓車、千	音丸大津郷	利乙 _カ

秋田県内出土の墨書土器、篋書・刻書土器



第6図 弘田柵跡における墨書土器出土地区



第7図 外郭南門周辺の遺構と文字資料

政庁域東方地区（34点）、D：内郭南門南方低地（内郭南門～外郭南門の間、86点）、E：内郭東門周辺（8点）、F：内郭北門周辺（7点）、G：内郭西門周辺（6点）となり、D・Bが多く、次いでA・Cに集中する。一方真山周辺では出土例はない。墨書文字一覧と地区別の文字について第4表にまとめる。

外郭南門周辺に着目する。ここでは南門と河川の間に土坑が点在する。この中には7次調査S K 60における嘉祥二年の木簡等、92次調査のS K 1029、93次調査のS K 1033土坑などでは墨書土器が出土している（第7図）。特にS K 1033は、土坑東端の底面に「須恵器長頸壺が置かれ、その西側に直径3～5 cmの杭が南北に3本並んで打ち込まれて」おり、壺底部には「秋」の墨書が認められる。本事例は何らかの祭祀に係る遺構と考えられ、土器の年代（9世紀中頃）、土坑の位置、外郭南門の位置とその存続期間（創建期のみ）から、「南門廃絶時の祭祀」に係わる遺構・遺物ではないかと想定したい。

また68次調査（内郭東門地区）第2層出土の第17図107は、平川南氏より「□〔靱カ〕大」と判読いただき、靱^{ゆげいのおおとも}大伴（姓）の略であろうとの見解をいただいた。土器は8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

籬書土器は、報告書などではあまり触れられておらず、点数的にもまだ多く存在が考えられる。確認している10点のうち政庁域で6点、内郭南門南西地区で2点が出土している。

③大曲市・仙北郡南部の遺跡

羽貫谷地遺跡

本資料は、千畑町畑屋字羽貫谷地で採集されたものであり、『秋田県遺跡地図（県南版）』には未登載の遺跡である。採集された時期は明確ではないが、10年以上前、水田の暗渠工事の際に出土したもののようである。遺物には須恵器（坏、甕、広口壺）、土師器（坏、甕）があり、土師器の甕には内外面にタタキ目をもつ破片も混じる。この中に1点の墨書土器が含まれていた。判読は不能であるが、須恵器坏底部に書かれている。土器は9世紀後半を前後する時期と推定する。

石名館遺跡（第15図84・85）

六郷町六郷と仙南村南町にまたがる本遺跡は、標高約35mの扇状地（沖積低地）に立地する。ここは明治年間より縄文時代晩期の遺跡として周知され、史前学雑誌などにも遺物の紹介がなされている。1983年に農業用排水路工事に伴う調査が実施され、縄文時代後期～晩期の土器、石器・石製品とともに僅かではあるが、平安時代の土師器・須恵器も出土した。墨書は、土師器坏体部に「田」と記されている。土器の年代は9世紀後半を前後する時期か。また出土位置は明確ではないが、石名館出土として「鳥の絵」が描かれた須恵器坏⁽¹⁰⁾（体部、正位）が千畑町郷土資料館に所蔵されている。

鎧ヶ崎周辺（第15図86）

六郷町六郷東根の鎧ヶ崎周辺で2点の墨書土器が採集されている。遺物は現在六郷町の学友館に保管されており、1点は須恵器坏底部に「他」と記される。

また大曲市怒遺跡、同藤木遺跡でも多量の墨書土器が出土している。出土状況等については前集成に記載してあるので参照いただきたい。ここでは文字種のみを列記しておく。

怒遺跡	𠂔(9)、𠂔(7)、𠂔・伴(5)、大(2)、川・厨・足・仙・春 ^カ (1)
藤木遺跡	伴(20)、伴 ^カ (5)、田(1)

なお怒遺跡の「𠂔」（第15図81～83）は、前集成では「凡」としていたが、平川氏によると、⁽¹⁾「大の篆書体「𠂔」の変形とみる方が妥当ではないだろうか」との見解が示されている。

（6）雄物川中～上流域（横手市・平鹿郡・湯沢市・雄勝郡）

本地域では、横手市7遺跡、平鹿町3遺跡、雄物川町・羽後町・湯沢市各2遺跡、稲川町1遺跡が知られる。

①中山丘陵に位置する遺跡群

横手盆地の中に半島状に張り出した中山丘陵には、古代の須恵器を生産した窯跡ははじめ多くの遺跡が存在する。文字資料を出土した遺跡は、竹原窯跡、上猪岡遺跡、富ヶ沢A窯跡、富ヶ沢B窯跡、田久保下遺跡が挙げられる。前2者は丘陵北西端に位置し、1988年東北横断自動車道建設に伴う調査が行われ、後3者は丘陵東端に位置し、1990年秋田ふるさと村建設事業に伴う調査がそれぞれ実施されている。両者は約3km離れている。

竹原窯跡（第19図128～131）

平鹿町上吉田間内にあり、奈良・平安時代の須恵器窯跡6基、灰原13箇所、住居跡1軒、土坑等が検出されている。ここからは墨書土器1点、籀書土器10点が出土している。墨書土器は、工房と想定される住居跡（S I 27）カマド内出土である。須恵器坏2個体を重ね倒立させ支脚として転用しており、内側の土器の底部に「継カ」の墨書が認められる。土器は9世紀前半～中葉となろうか。籀書土器は、1点（遺構外出土）が中世以降と考えられる土師質土器の埴見込みに「五十集屋敷」と記され、他9点は須恵器（坏類、壺）底部内外面に認められる。後者のうち出土位置の明確なのは6点あり、いずれもS J 05とした須恵器窯内及びその灰原（S T 19）出土である。S J 05は8世紀代の窯であり、籀書がこの奈良期の窯に伴う点に注目できる。籀書は底部外面に「三」「十」「吉カ」などと記される。遺構外では「井」「工」や底部内面に木の葉状の絵画（？）を描いたものも出土している。

上猪岡遺跡（第21図172・173）

横手市猪岡にあり、竹原窯跡の北側に隣接している。調査により縄文時代中期・晩期の土坑、

弥生時代の住居跡などと平安時代の須恵器窯跡1基、竪穴状遺構、土坑などが検出された。篋書土器は2点あり、いずれもSK27とした土坑確認面出土である。この面は拳大から径35cm程度の円礫46個が径1.2m前後の円形に配された、いわゆる配石遺構と見られ、篋書1点(173)はこの中に「正立の状態で埋設」されていた。また配石と同一レベルで灰白色の火山灰が検出され、報告では「遺構内に人為的に入れられたもの」と考えている。火山灰が十和田火山に起源をもつとすれば、遺構の上限年代を10世紀前半とすることができる。篋書は2点とも土師器甕に記される。172は、胴部中央の2ヶ所に見られ、「一方は帆掛け船状のものであり、ちょうど反対側には十字状を呈する」。173にも「模様が描かれている」。

富ヶ沢A窯跡(第19図132)

本窯跡は、次に述べる富ヶ沢B窯跡、田久保下遺跡と共に横手市赤坂に所在し、標高75～80m程の同一丘陵緩斜面に立地する。A窯跡は丘陵東側斜面に位置しており、調査の結果、平安時代の須恵器窯跡1基、平窯跡(土師器焼成遺構)2基、住居跡1軒、土坑、溝状遺構などが検出された。墨書は、須恵器窯跡に隣接した土坑(SK07)出土の須恵器坏底部に「一」(一の両端に小さい点がつく)と記されている。篋書は本調査前年の範囲確認調査時に出土しており、土師器の坏底部に認められる。

富ヶ沢B窯跡(第19図133～138)

富ヶ沢A窯跡の南西約150mに位置し、丘陵南西斜面に立地する。ここでは須恵器窯跡2基が検出され、窯内及び灰原より多量の須恵器が出土している。文字資料は、灰原より篋書土器14点、刻書土器2点が出土している。133、134は短頸壺の蓋と思われ、外面に「智光研」「建万呂研」と記されている。「研」は「硯」との釈読を平川氏よりいただいた。その他、坏類では、双耳坏の両耳部に「十」、体部に「所」「美」「口田」、底部に「一」など、底部内面に不定方向の細い篋書が見られる資料もある。甕類では、口縁部に「山」「十」、胴上半部に「真カ」、小壺の底部にも認められる。一方、2点の刻書は坏体部にいずれも「字」と縦長に書かれる。同一人物の仕事と思われる。焼成後に記された「字」が灰原内から出土した点に着目しておきたい。これらの土器は、器種、篋書、刻書の別で文字等の記載方向が異なる。すなわち坏類の体部に篋書が見られる場合は、全て倒位に、刻書の場合は正位に記され、甕類も正位となる。

田久保下遺跡

富ヶ沢A窯跡の南東約100mに位置し、北東斜面に立地する。調査の結果、古墳時代(6世紀代)の土墳墓8基、平安時代の須恵器窯跡3基、炭窯跡1基、住居跡6軒、建物跡5棟、土坑等が検出された。古墳時代の土墳墓は、その規模、形態、副葬品の埋納方法などにおいて、北海道の続縄文文化期と類似性の高いことが報告されている。篋書土器は2点確認しており、須恵器窯跡(SKJ303)内から大甕外面に不定方向の細い線書が、遺構外出土の土師器坏体部

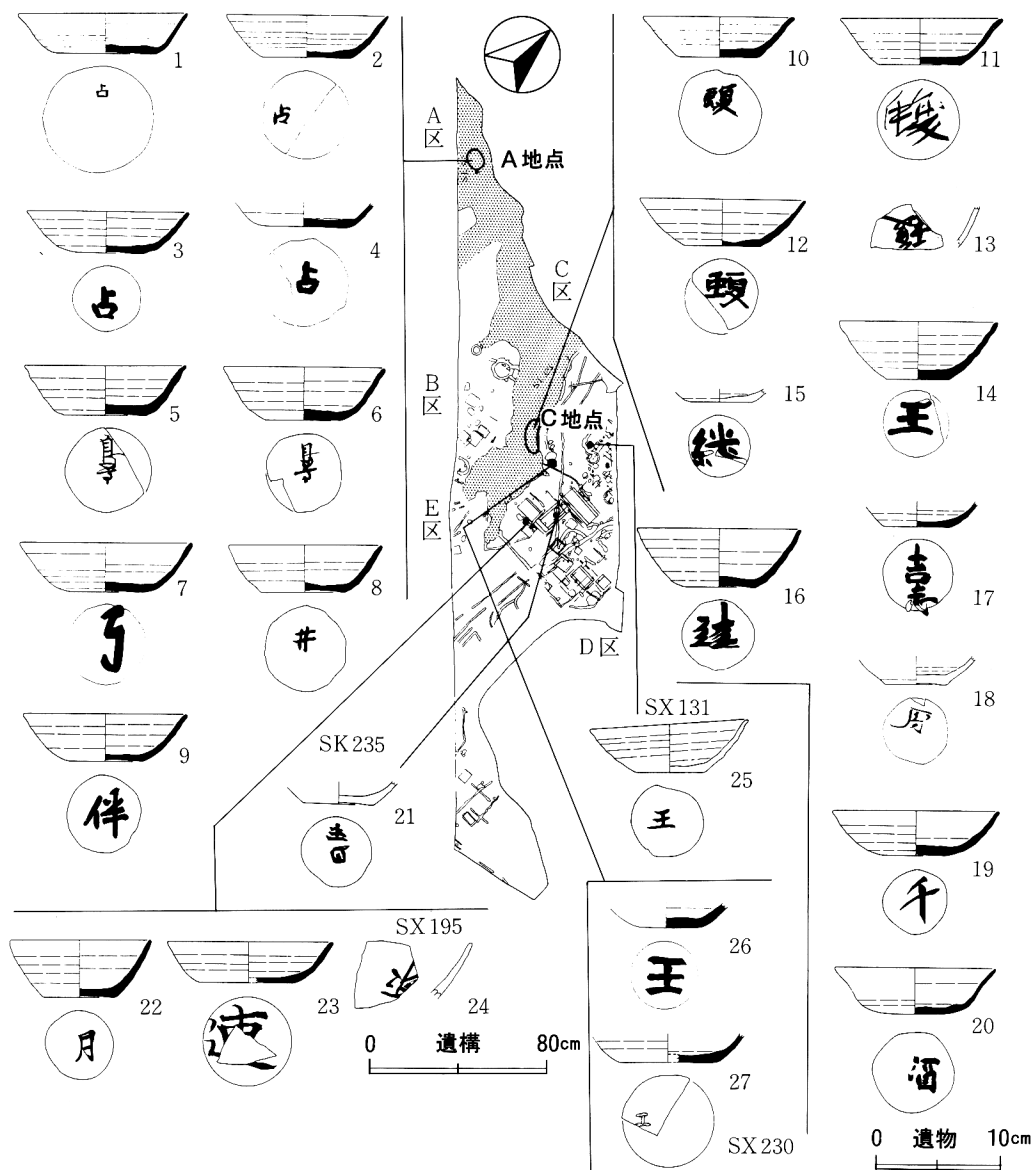
に「×」がそれぞれ記される。以上3遺跡は9世紀中葉～後半の時期を考えている。

②手取清水遺跡（第8・20図）

横手市清水町新田にあり、雄物川の小支流皿川左岸の低位段丘上（標高約42m）に立地する。1987年に東北横断自動車道建設に伴う発掘調査が実施され、縄文・弥生時代から、古代・中世・近世にかけての複合遺跡であることを明らかにした。文字資料は、調査区中央部に位置する旧河川内を中心として、木簡6点、将棋の駒（桂馬）1点、墨書土器132点、箆書土器1点が出土した。木簡5点と駒は「13世紀中頃から14世紀後半のもの」であり、その他の資料は、平安時代に帰す。該期の遺構は、掘立柱建物を主体としており、墨書土器の多さなどと合わせ「一般集落とは異なる機能をもった集落と推定」、あるいは一步進んで官衙的色彩の強い集落の一部とも推定される。

墨書土器は報告書では器種・器形・墨書部位などから検討を加えている。これによると、器種別では須恵器と土師器の比率が3：1で須恵器が優勢であること、器形では坏類が圧倒的に多く甕・壺には見られないこと、部位別では底部に書き込まれる率が高く（91%）、これは秋田城跡、払田柵跡を上回ることを記している。また墨書文字と底部切り離しの関係についても言及している。ここでは墨書土器等の出土状況に着目して再検討する。

墨書土器は旧河川に集中的に分布し、ここで109点が発見されている。しかも資料は河川内の2箇所にとまりを見せる。さらに2つのまとまりは、土器に書かれた文字種の違いも見いだせるのである。河川の下流にあたる第8図のA地点では、30点程の墨書土器が出土しており、複数例ある「占」「弓」「鳥麻呂」は本地点のみで確認でき、C地点では見られない。一方C地点は60点以上の墨書土器が出土し、「蜺」「王」「継カ」「吉志カ」等は基本的に本地点でのみ検出され、A地点では認められない。しかしこれらは全てが排他的に分布するのではなく、両地点に見られる文字も存在する。「井」「酒カ」は両地点に各1点ずつ出土している。なお「厨カ」はC地点出土である。また旧河川以外で出土位置の明らかなのは、遺構内14点、遺構外6点である。これらはいずれも報告書でD・E区とした旧河川東岸の区域でのみ発見され、対岸のB区では全く見つかっていない。墨書土器がいわゆる祭祀に係る遺物であるとすれば、祭祀行為は専ら河川東岸域（D・E区）で行われていたと考えられ、何らかの祭祀の最終段階で土器は川に投棄される（C地点）。一部は土坑等（SX195など、ここには8点の墨書土器が含まれていた）にも投棄する。しかも墨書土器の分布と文字種の違いから想定すると、D・E区とは性質の異なる祭祀がA地点周辺の調査区外でも行われていた可能性は高い。両祭祀は9世紀中頃～後半を中心とする時期に実施されたようであるが、土器の量からA地点がやや先行するかもしれない。墨書文字種を第8図下に一覧する。一方、箆書土器は1点出土しており、「王」の墨書土器が検出されたSX230土坑内より須恵器坏底部に「工」と記されている。



1~9: A地点出土 10~20: C地点出土 21~27: 遺構内出土

※断面黒塗りは須恵器

1~4:占 5・6:鳥麻呂 7:弓 8:井 9:伴

10~13: 蝮 14・25・26: 王 15・16: 継力 17: 吉志力

18: 厨力 19: 千 20: 酒力 21: 主/日 22: 月力 23: 連

24：取力 27：工（篋書）

一文字	蝮(9)、蝮 _ナ (2)、占(9)、占 _ナ (1)、王(9)、繼 _ナ (7)、主・井・弓・日(2)、安 _ナ ・月 _ナ ・		
酒 _ナ ・石 _ナ (2)、中・連・伴・祢・千(1)、千 _ナ ・厨 _ナ ・荒 _ナ ・取 _ナ (1)	籀書	工(1)	
二文字	□□〔吉志 _ナ 〕(2)、吉□〔志 _ナ 〕・韓□(1)	三文字	鳥麻呂(2)、□麻呂(1)

第8図 手取清水遺跡における墨書土器等の出土位置と文字

③大鳥井山遺跡

横手市大鳥町にあり、標高70～80m程の小吉山、大鳥井山、台所館と称される独立3小丘陵上に立地する。1977年から7次にわたる調査が実施され、小吉山では二重の土塁・空堀と柵列に囲まれた内部に掘立柱建物を中心とする建物群が検出され、出土遺物から11世紀から12世紀前半に存続した防御性の極めて強い柵跡と考えられる。本遺跡は、『陸奥話記』などの文献に登場し、後三年の役（1083～1087年）で滅亡する清原氏の一族大鳥山太郎頼遠の本拠地と擬定されている。篋書土器は、第1次調査において大鳥井山地区東方の遺構外より1点出土している。須恵器甕胴上半部に「君」と記される。

④湯沢市・雄勝郡内の遺跡

城神巡り遺跡（第19図139）

羽後町土館にあり、新城川・ひばり野・七窪地区と合わせ足田遺跡群として周知される。墨書土器は24点確認している。1912年（大正元年）の湿地部分の試掘で18点、1961年の第1次調査で5点、翌年の第2次調査1点であり、遺構内から得られた資料はない。出土状況などについては前集成時の記述を参照いただきたい。文字種は、淨(2)、行・玉・今・鎮・連・若・果・廣・川・赤麻・赤磨・是木・千万(各1)であり、前集成で「□〔答カ〕」としていた139は、平川氏の指摘で筆順から「若」と判読いただいた。

柏原古墳群（第19図140）

羽後町大久保にあり、雄物川上流域左岸の河岸段丘上（標高約68m）に立地する。1986年より継続的な範囲確認調査が実施され、東西250m、南北150m程の範囲内に60基以上の古墳が存在することを確認している。古墳の規模は、周堀外周で径4～4.5mの円墳が最小で、最大は径12m程である。また主体部は墳丘同様削平を受け明確でなかったが、1992年の調査により、初めて検出された。古墳群の構築年代は、土師器・須恵器等の遺物から8世紀中葉～9世紀後半、周堀に堆積している火山灰（十和田a）から下限を10世紀前半と想定できる。墨書土器は遺構外より2点出土している。いずれも土師器坏体部に記され、1988年の範囲確認調査出土では、正位に「真」、1992年の調査出土は判読不能である。これらの土器は9世紀後半か。

取上石山（広沢山）遺跡

湯沢市山谷にあり、標高約158mの丘陵南向斜面に立地する。1955・56年に湯沢市教育委員会により発掘調査が行われ、「土師器製造用の」住居跡・平窯などが検出された。篋書土器は、文献41によると、「ヘラ書文字入土師器片」が出土しており、掲載の写真から判断する限りでは、土師器長胴甕(?)の胴上半部に記されている。この土器は成形にタキを用い、その後ロクロ整形を行っているようである。9世紀代か。

稲庭城跡

稲川町稲庭古館にあり、標高300m程の山地尾根端部に立地する連郭性の山城である。1986年に一部（二の丸）が発掘調査され、建物跡、石垣状遺構、土坑などが検出され、鎌倉～江戸時代までの陶磁器類、古銭が出土した。文字資料は墨書が1点見られ、江戸期とされる陶器（台付甕）の胴中央部に「ネ」と反対側に「匁」と書かれている。

（7）子吉川流域（本荘市・由利郡）

本地域では西目町4遺跡、仁賀保町2遺跡、本荘市、東由利町、象潟町各1遺跡が知られる。

①上谷地遺跡（第21図156～159）

本荘市土谷にあり、子吉川下流域右岸の標高7～8mの沖積地に立地する。本遺跡は、大正11年頃耕地整理した際に「角材で貫穴のある柵柱」が「無数」発見されたことが近年再確認され、出土遺物から導き出される年代、遺跡の位置、文献などから「由理柵」の有力な疑定地とされる。発掘調査は行われていないが、地元の郷土史探求サークル会による遺物の採集が断続的になされ、その一部は資料紹介されている。この中に6点の墨書土器が含まれている。いずれも土師器坏に書かれ、4点は体部正位に「友」「月」「厨カ」「□□」、2点は底部にであるが判読不能である。墨書の見られる土器は9世紀後半と想定される。

②西目潟周辺の遺跡

西目町西目・沼田に存在した西目潟は江戸時代後期に干拓され、現在は水田となっている。この周辺には、弥生土器、5世紀代の土師器・須恵器や北海道系の北大Ⅰ式土器、8世紀代の土師器などが出土する宮崎（沼田）遺跡や、県内唯一で北限の子持勾玉出土地（井岡）、8世紀後半～9世紀初頭の須恵器を焼成した葛法窯跡などが位置している。文字資料は、かつての西目潟南縁の井岡集落近辺の客殿森遺跡、井岡遺跡、井岡西遺跡、中谷地遺跡で確認されている。これらの資料は、西目町在住の池田正治氏により採集されたものである。

客殿森遺跡（第21図160）

井岡集落の北端部に位置し、1点の墨書土器が採集されている。須恵器高台付坏底部に「酒下」と書かれている。土器は8世紀代と考えられる。

井岡遺跡（第21図161～164）

集落の東部にあり、墨書土器73点、篋書土器3点が得られている。墨書は須恵器63点、赤褐色土器8点、土師器2点であり、須恵器の蓋1点を除き坏類に記されている。墨書文字種とその点数は以下の通りである。

一文字	三(7)、人(5)、丈・井(3)、主・羽・𠂔・女・中・生・太・大(1)、人𠂔(4)、三𠂔・		
四𠂔皿・二𠂔・丈𠂔・井𠂔・全𠂔・日𠂔(1)	二文字	井□[𠂔𠂔]→井岡𠂔(1)	

採集点数の多い「三」（三カを含む）と「人」（人カを含む）に着目すると、墨書文字と記名部位の間に相関が見いだせる。前者は須恵器坏の底部にのみ記され、後者は同じく須恵器坏ではあるが、全て体部倒位に書かれる。また「𠂔」は字形より「羽」を意図したものか。「井口〔𠂔カ〕」は「井岡カ」と見られることから、当地名の発祥を考える上でも貴重な資料である。164は土師器坏体部に記されているが、判読不能である。字形からは後世の花押にも似る。一方、籀書土器は土師器2点、須恵器1点の坏類底部にそれぞれ「十」あるいは「×」と記されている。これら土器の年代は8世紀後半から9世紀代と想定する。

井岡西遺跡

井岡遺跡の西方に位置し、墨書土器1点が採集されている。赤褐色土器坏底部に「中」と書かれる。

中谷地遺跡（第21図165）

客殿森遺跡の北西約1kmに位置し、宮崎遺跡東方に隣接する。前出の池田氏が1988年に採集したものであり、須恵器坏体部（正位）に「上」と書かれている。なお、本遺跡と井岡西遺跡は共に新発見の遺跡であり、『秋田県遺跡地図（中央版）⁽¹²⁾』には未掲載である。両遺跡とも土器から9世紀代と想定できる。

③仁賀保町・東由利町の遺跡

立沢遺跡（第21図166～168）

仁賀保町立沢にあり、日本海まで700m程の沖積地（標高約18m）に立地する。1979年工場用地造成に伴う発掘調査が実施され、10世紀前半を中心とする時期の掘立柱建物を主とする集落の一部が検出された。ここでは遺構内外より、墨書土器6点、籀書土器2点が確認されている。墨書で判読できたのは、166の「O」（須恵器坏底部）のみであり、籀書の2点は赤焼土器坏底部に「×」と記されている。

宮ノ前遺跡（第21図169）

東由利町法内にあり、子吉川の支流高瀬川右岸の河岸段丘上（標高約10.5m）に立地する。町道拡幅工事に伴い1992年に町教育委員会が発掘調査を実施し、主に縄文時代晩期の土坑等が検出された。遺構外より平安時代の須恵器・土師器が少量確認され、この中に墨書土器が1点含まれていた。土師器坏底部に「方」と書かれている。時期は報告では「10世紀後半」と想定している。

4 まとめ—資料の再検討

前項では当該土器を出土した遺跡毎にその分布・出土状況を簡略に記したつもりである。ただ出土量の多い、秋田城跡、払田柵跡については、墨書を中心とした文字種の一覧と地区別の分布状況に若干言及したに留まり、各遺構内でのあり方までは手が回らなかった。ぜひとも別稿で検討を加えたい。ここでは、上記2遺跡を除く、集落・生産遺跡について資料の再整理から導き出される事項を整理し、次につなげるべくまとめておきたい。

(1) 米代川流域の資料

米代川流域の特に上流域は、当該資料の出土位置、記入部位において強い共通性が認められる。まず鹿角・大館における墨書土器は、5遺跡から13点出土しているが、全て竪穴住居跡から検出され、墨書は土師器の体部に記される。体部記入は、同中流域まで及ぶ。鷹巣町胡桃館は4点とも須恵器ではあるが、いずれも体部に書き込まれる。出土遺構の特定という観点では、籬書も採集資料を除けば竪穴住居跡あるいは竪穴遺構から確認されている。ところが、米代川も下流・沿岸域に至ると共通性は見られなくなる。墨書は土師器の底部にも須恵器の体部にも認められる。出土位置も竪穴住居跡の他に、土坑、焼土遺構、遺構外でも検出される。本地域での特徴は前項でも述べたように、「大」の墨書が3遺跡から出土している点であろう。福田遺跡では焼土内に「大」の墨書土器が埋められた状態で確認されている。

(2) 御所野台地の資料

米代川中・上流域と対峙するのは本地域であろうか。墨書、籬書を含め6遺跡から7点の出土ではあるが、土器の種別を問わず全て底部に記される。ただ出土遺構については、籬書である湯ノ沢Fが土坑墓である以外は米代川中・上流域同様竪穴住居跡出土である。底部の墨書は、秋田城跡を除く秋田市周辺の遺跡では高率で、体部墨書は、下新城の「明」と待入Ⅲの計2点のみである。

(3) 墨書の部位

墨書土器における底部への書き込みは、県北から南下・流下するにつれ次第に増すようにも取れる。ここで少しこの点について調べておく。秋田城跡では坏類の約75%、大曲・仙北の払田柵跡、怒、藤木などは60%台、横手の手取清水は90%、羽後町の城神巡りでは100%が底部に記される。土器の種別には触れなかったが、県南部に進むにつれ須恵器へ書き込まれる割合が高くなるようである。これらの意味するところは不明であるが、本記録を残しておく。

(4) 河川・沼沢・低地から多量に出土する墨書土器

墨書土器等は、①竪穴住居跡等の居住施設から出土、②土坑、土坑墓等の非居住施設から出土、③遺物包含層（遺構外）から出土、④河川・沼沢など比較的狭い範囲内から多量に出土の場合がある。①～③は原則的には1～数点の出土である。ところが④は数10点からそれ以上出

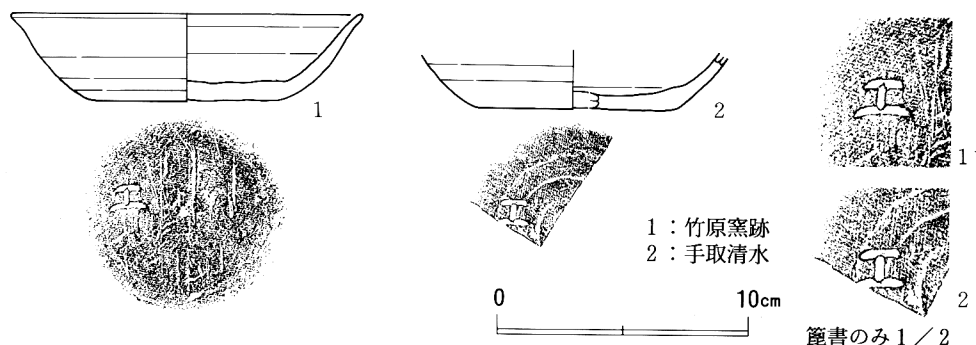
土する。小谷地、手取清水、怒、藤木、井岡などが挙げられよう。小谷地では文献16bによると、墨書等を出土した1～3次調査において469点の土師器、須恵器が出土しているが、そのうちの34%にあたる土器に墨書が認められるのである。特に3次調査では30㎡の範囲内に100点を超す墨書土器が見つかった。怒でも墨書を含む土器が200㎡程の地点から完形だけでも500点、その破片は4斗入れ米俵で10俵も出たそうである。井岡も水路の断面が雨水などで崩れたほんの狭い範囲内から墨書土器だけでも70点以上採集されている。

(5) 工人が書いた「工」の篋書

今回の一連の作業において、同一の書き手と思われる資料を異遺跡間で発見できたので、これをまとめた最後に示しておく。それは、「工」と記された須恵器の坏である。1点は、竹原窯跡遺構外出土（須恵器生産工人の工房と推定される住居に近接した位置）もう1点は手取清水遺跡SX230土坑出土である。以下の点から同一人物によるものと判断した。まず土器は手取清水例は破片であるが、僅かに丸味をもつ底部と法量（底径7.4cm）が一致する。「工」は坏底面の左やや上に小さく記す。その文字の大きさ、書き順はもとより、一画目はまさに酷似する。第9図に両者の実測図を載せてあるので確認いただきたい。竹原例は窯内出土ではないが、本窯のいずれかで焼成されたと考えてよい。とすれば手取清水の土器は竹原で「工」と記入され、焼成後に運び込まれたと解することができよう。両遺跡は距離にして3km程であるが、需要、供給の関係については論じられたことはなかった。「工」の篋書を介して両者のつながりの一端はつかめたことになる。

おわりに

古代城柵官衙遺跡検討会での発表をきっかけとして小稿は成った。横手盆地の事例を発表するのに、比較検討の必要性から秋田城跡の資料も調査した。ここまでやるのであれば、ということで県内全体を対象とした上で本誌に掲載となったものである。今思えば風呂敷を広げ過ぎた感は否めないが、一応次回につなぎ得る資料の提示はできたものとする。



第9図 同一工人による「工」の篋書土器

小稿が成るにあたり、国立歴史民俗博物館 平川南氏、秋田大学 熊田亮介氏はじめ、秋田城跡調査事務所、弘田柵跡調査事務所、秋田県埋蔵文化財センターの先輩、同僚の皆様に御指導、御協力いただきました。深く御礼申しあげます。

文献

- 1 高橋学「秋田県内出土の墨書土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 1986（昭和61年）
- 2 秋田県教育委員会「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』1983（昭和58年）
- 3 秋田県教育委員会「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』1982（昭和57年）
- 4 秋田県教育委員会「案内Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』1983（昭和58年）
- 5 秋田県教育委員会「下乳牛遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』1984（昭和59年）
- 6 藤井安正「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」『考古風土記』第8号 1983（昭和58年）
- 7 十和田高校社会科同好会「神田遺跡」『山脈』22 1974（昭和49年）
- 8 秋田県教育委員会「堪忍沢遺跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1987（昭和62年）
- 9 秋田県教育委員会「太田谷地館跡第2次調査」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』1989（平成元年）
- 10 秋田県教育委員会「用野目川向Ⅲ遺跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1989（平成元年）
- 11 大館市教育委員会『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』1990（平成2年）
- 12 比内町教育委員会『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』1978（昭和53年）
- 13 能代市教育委員会『大館遺跡発掘調査報告書』1978（昭和53年）
- 14 秋田県教育委員会「福田遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989（平成元年）
- 15 秋田県教育委員会「十二林遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989（平成元年）
- 16 a 三嶋隆儀・庄内昭男「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」『秋田県立博物館研究報告』第12号 1987（昭和62年）
b 秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第3次調査概報』1967（昭和42年）
- 17 門間光夫「推定古代郡衙址「石崎遺跡」」『秋大史学』第15号 1968（昭和43年）
- 18 秋田市教育委員会『昭和60年度秋田城跡発掘調査概報』1986（昭和61年）～『平成5年度秋田城跡発掘調査概報』1994（平成6年）、※平成6年度第62次調査分まで含む
- 19 奈良修介「歴史時代」『秋田県史考古編』1960（昭和35年）p243
- 20 秋田市教育委員会「湯ノ沢B遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1983（昭和58年）
- 21 秋田市教育委員会「湯ノ沢F遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984（昭和59年）

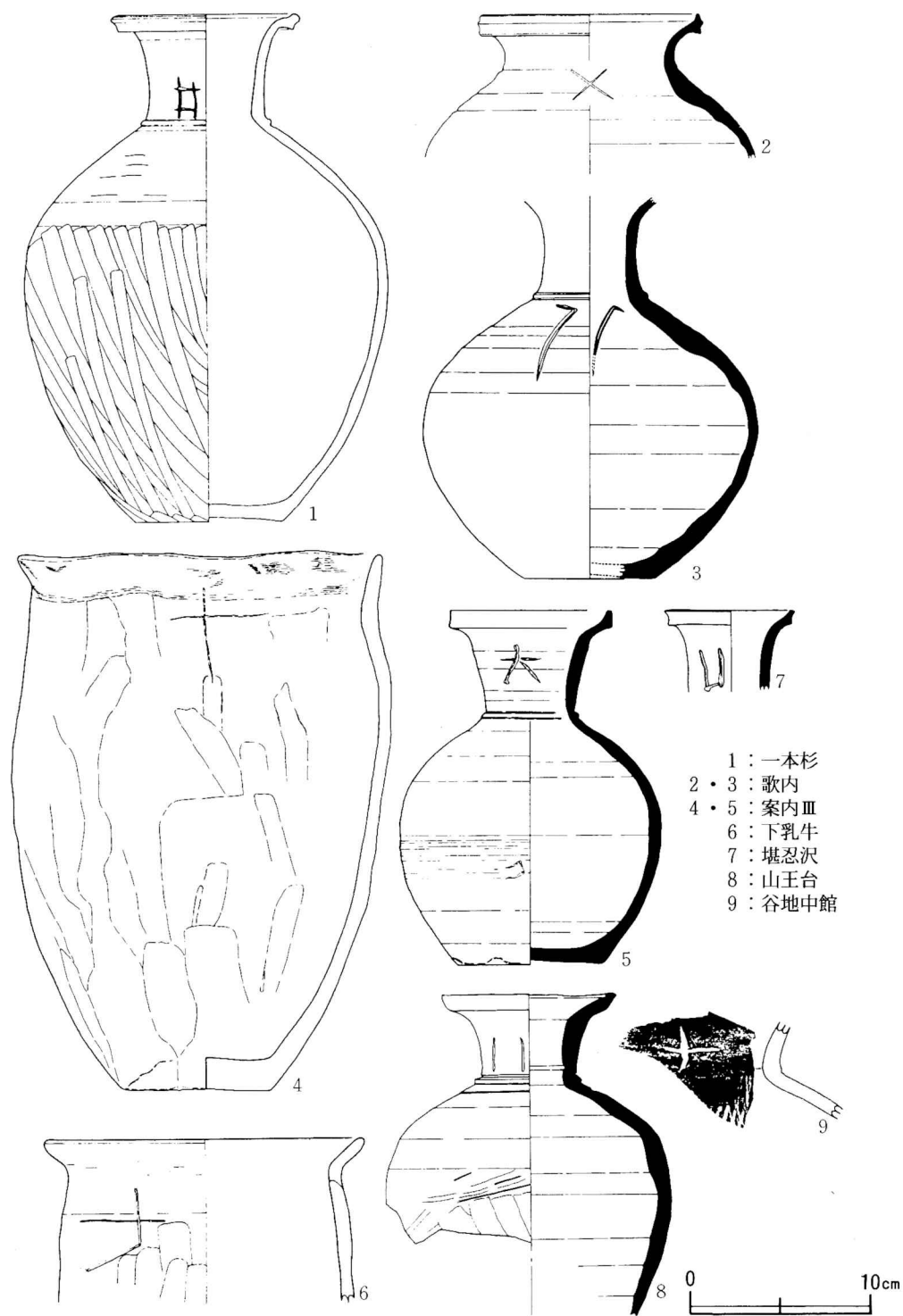
- 22 秋田市教育委員会「下堤C遺跡『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
(昭和62年)
- 23 秋田市教育委員会「地蔵田A遺跡『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1993
(平成5年)
- 24 秋田県教育委員会『山崎遺跡発掘調査報告書』1992(平成4年)
- 25 秋田県教育委員会「待入Ⅲ遺跡『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
1992(平成4年)
- 26 秋田県教育委員会「松木台Ⅲ遺跡『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』1986(昭和61年)
- 27 秋田県教育委員会『上雨堤遺跡発掘調査報告書』1986(昭和61年)
- 28 南外村教育委員会『大畑・松山腰窯跡発掘調査報告書』1992(平成4年)
- 29 秋田県教育委員会『払田柵跡－第60～64次調査概要－』1986(昭和61年)～『払田柵跡－第94～97次
調査概要－』1994(平成6年)、※平成6年度第100次調査分まで含む
- 30 秋田県教育委員会『石名館遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59年)
- 31 六郷町『六郷町史』上巻 1992(平成4年)
- 32 秋田県教育委員会「竹原窯跡『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ』1991(平成3年)
- 33 秋田県教育委員会「上猪岡遺跡『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ』1991(平成3年)
- 34 秋田県教育委員会「富ヶ沢A窯跡『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告
書』1992(平成4年)
- 35 秋田県教育委員会「富ヶ沢B窯跡『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告
書』1992(平成4年)
- 36 秋田県教育委員会「田久保下遺跡『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告
書』1992(平成4年)
- 37 横手市教育委員会『秋田県横手市遺跡詳細分布調査報告書』1986(昭和61年)
- 38 秋田県教育委員会「手取清水遺跡『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ』1990(平成2年)
- 39 横手市教育委員会『大烏井山Ⅰ』1978(昭和53年)
- 40 a 羽後町教育委員会『柏原古墳群発掘調査報告書』1989(平成元年)
b 羽後町教育委員会『柏原古墳群』『福島遺跡ほか発掘調査報告書』1993(平成5年)
- 41 山下孫継(編著)『湯沢市雄勝郡の埋蔵文化財』湯沢市教育委員会 1961(昭和36年)
- 42 稲川町教育委員会『稲庭城跡発掘調査報告書』1987(昭和62年)
- 43 富樫泰時・児玉準「本荘市上谷地遺跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号1992
(平成4年)
- 44 池田正治・高橋学「由利郡西目町で採集された墨書土器－土の下の歴史を求めて－」『秋田考古学』
第39号 1987(昭和62年)
- 45 高橋学「西目町井岡遺跡で採集された遺物について」『秋田考古学』第40号 1990(平成2年)
- 46 仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』1986(昭和61年)
- 47 仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告書』1987(昭和62年)
- 48 東由利町教育委員会『宮ノ前遺跡発掘調査概報』1994(平成6年)
- 49 秋田県教育委員会『カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書』1986(昭和61年)

註

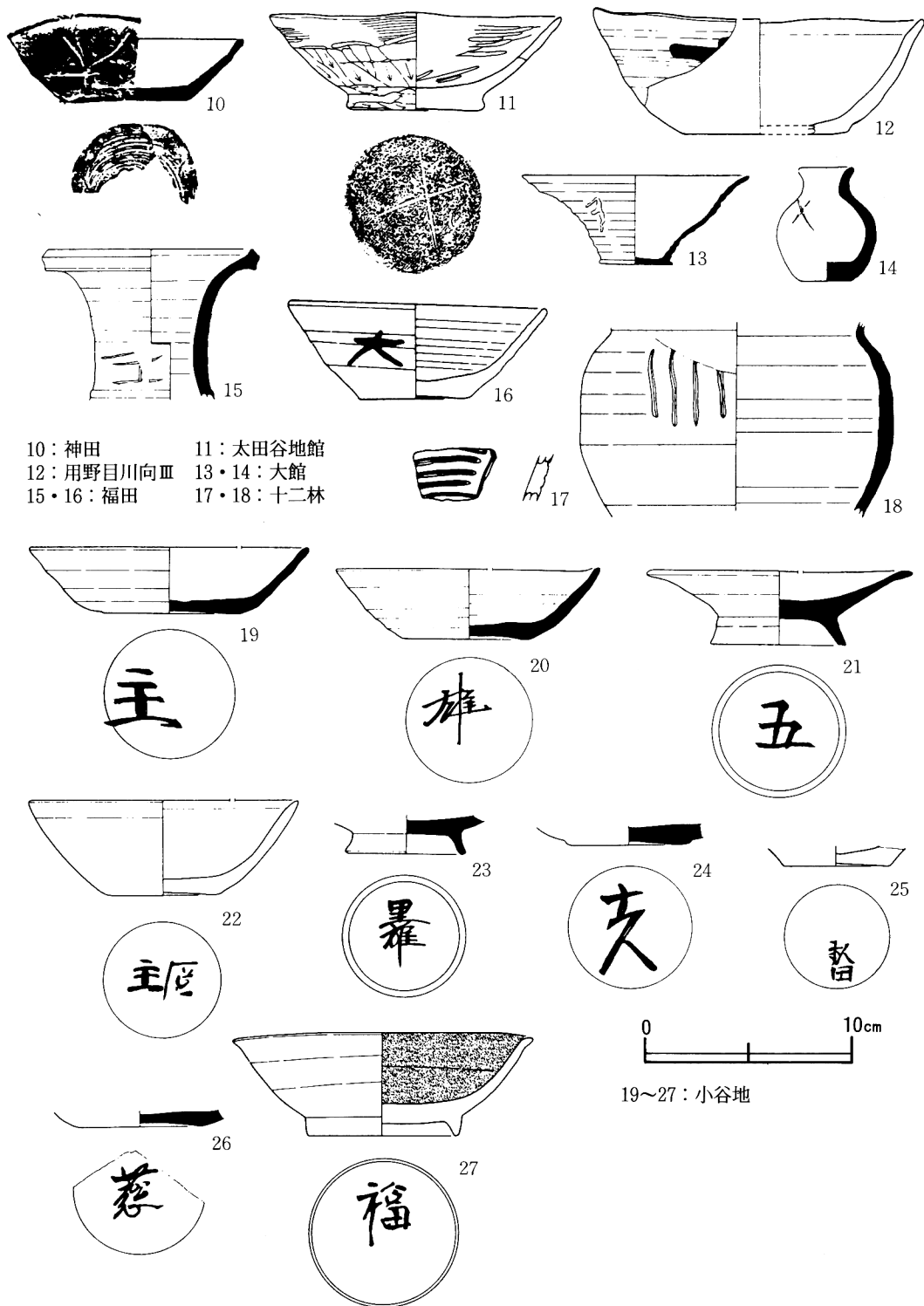
- 1 もちろん全ての該当する資料を実見してはいないので、簞書としたなかには刻書となりうる資料も含まれている可能性はある。
- 2 苫小牧火山灰の時期については、青森県内での事例から近年は「10世紀中頃とみなす見解が主流」と記されている。青森県教育委員会『中野平遺跡－古代編－』p311 1991（平成3年）
- 3 文献16 p55の註5参照
- 4 秋田市教育委員会『秋田城出土文字資料集』1984（昭和59年）
- 5 これは、1995年1月27日に開かれた金曜会（秋田城跡調査事務所を会場とする研究会）において、小松陽子氏が「秋田城出土の墨書土器について－1－」と題する発表のなかで明らかにしたものである。
- 6 赤褐色土器は、酸化炎焼成で色調が赤褐色、明褐色、黄褐色を呈し、内面のヘラミガキと黒色処理が認められない土器を指す。同定義の土器に対しては、研究者により赤焼土器、土師器と表記している場合もある。
- 7 「夫」字の資料をまとめ検討を加えた論考には、小口雅史「「夫」字簞（墨）書について」『海峡をつなぐ日本史』北海道・東北史研究会（編）1993（平成5年）などがある。
- 8 内田武志・宮本常一（編）「月の出羽路 仙北郡二ノ下」『菅江真澄全集』第7巻 1978（昭和53年）
- 9 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）
- 10 鳥の絵の図は、富樫泰時『日本の古代遺跡 24 秋田』1985（昭和60年）p183に掲載
- 11 平川南「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991（平成3年）p125
なお怒遺跡の実測図は、大川清『墨書土器』1958・59（昭和33・34年）より引用した。
- 12 「研」の文字そのものは、鉱山・土木用語の「ずり」（掘り出された岩石や土砂）を指す。
- 13 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成2年）

※集成図掲載原典一覧（調査回数、概報発行年、原典掲載頁と番号）

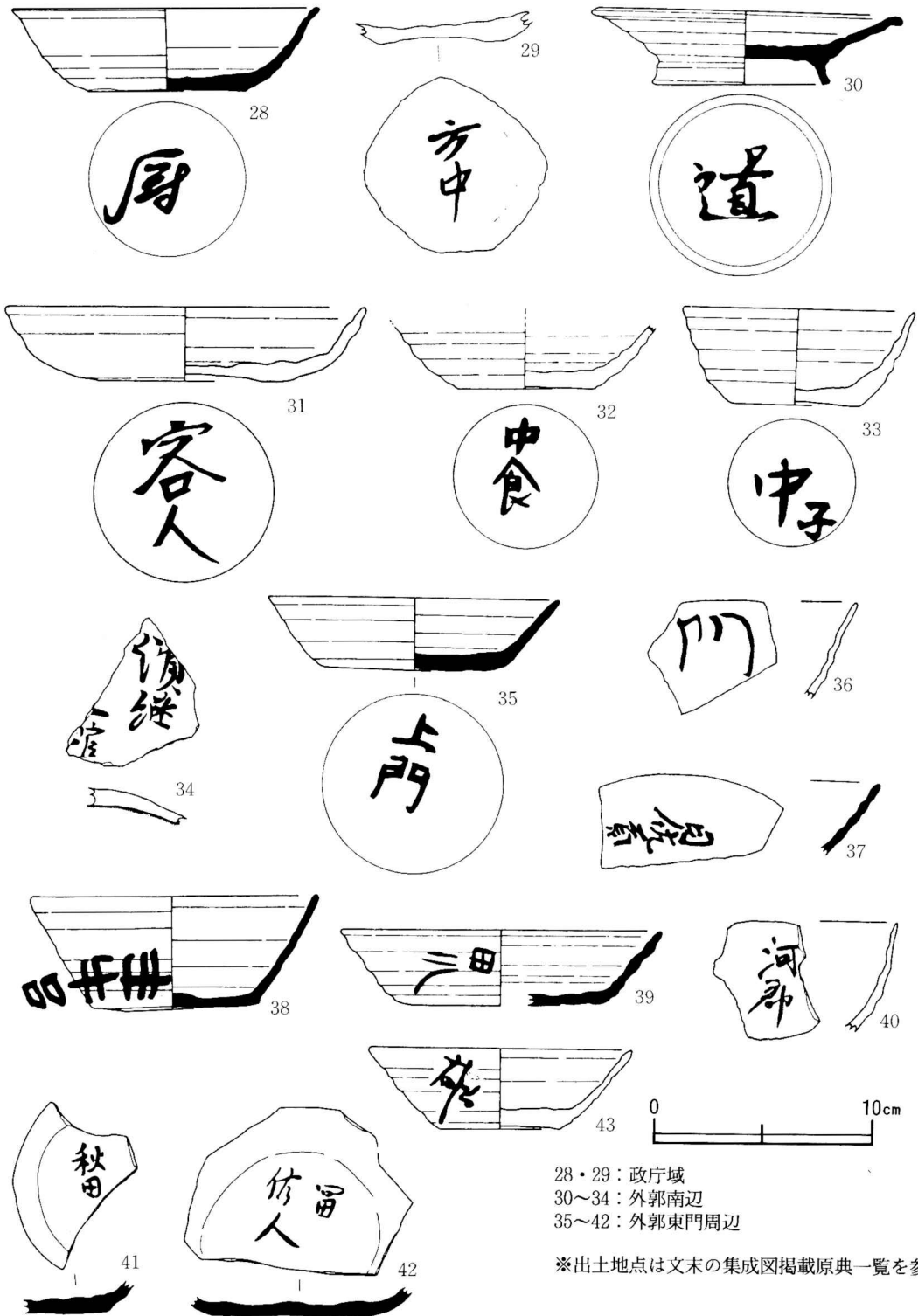
秋田城跡出土（28:40次1985p39-2、29:49次1988p30-7、30:44次1987p28-2、31:同p56-13、32:同p12-15、33:同p56-6、34:同p41-1、35:54次1991p73-6、36:同1990p12-11、37:同p50-16、38:同1991p26-20、39:同p32-21、40:同1990p56-9、41:同1991p33-34、42:同p26-25、43:同1990p40-9、44:同1991p28-17、45:同1990p61-17、46:同1991p73-7、47:同p40-57、48:同p55-6、49:同1990p34-3、50:同1991p52-4、51:同p52-6、52:56次1992p10-5、53:同p33-14、54:60次1994p65-10、55:同p69-9、56:同p39-2、57:同p21-11、58:同p65-9、59:同p64-11、60:同p28-7、61:同p40-1、62:同p21-7、63:同p69-8、64:58次1993p23-1、65:同p26-7、66:同p26-8、67:61次1994p80-1、68:55次1991p112-4、69:同p112-7、70:同p112-3、71:同p107-1）
払田柵跡出土（87:47次1983p26-6、88:同p27-19、89:35次1981p40-7、90:同p44-40、91:49次1984p16-65、92:同p16-66、93:95次1994p62-1、94:同p79-37、95:同p62-2、96:94次1994p19-14、97:同p20-23、98:同p19-13、99:同p23-61、100:同p20-21、101:同p23-55、102:92次1993p32-3、103:同p33-10、104:同p33-11、105:93次1993p57-1、106:同p57-3、107:68次1988p28-14、108:同p28-13、109:60次1986p34-69、110:同p31-55、111:85次1991p38-27、112:93次1993p74-19、113:同p74-17、114:同p74-18、115:同p74-24、116:同p79-8、117:同p79-9、118:92次1993p26-13、119:同p25-9、120:93次1993p49-7、121:同p50-17、122:同p49-6、123:同p53-44、124:同p53-43、125:同p53-41、126:同p69-2127:55次1985p22-2）



第10図 墨書土器等集成図(1) 米代川上流域の篋書土器



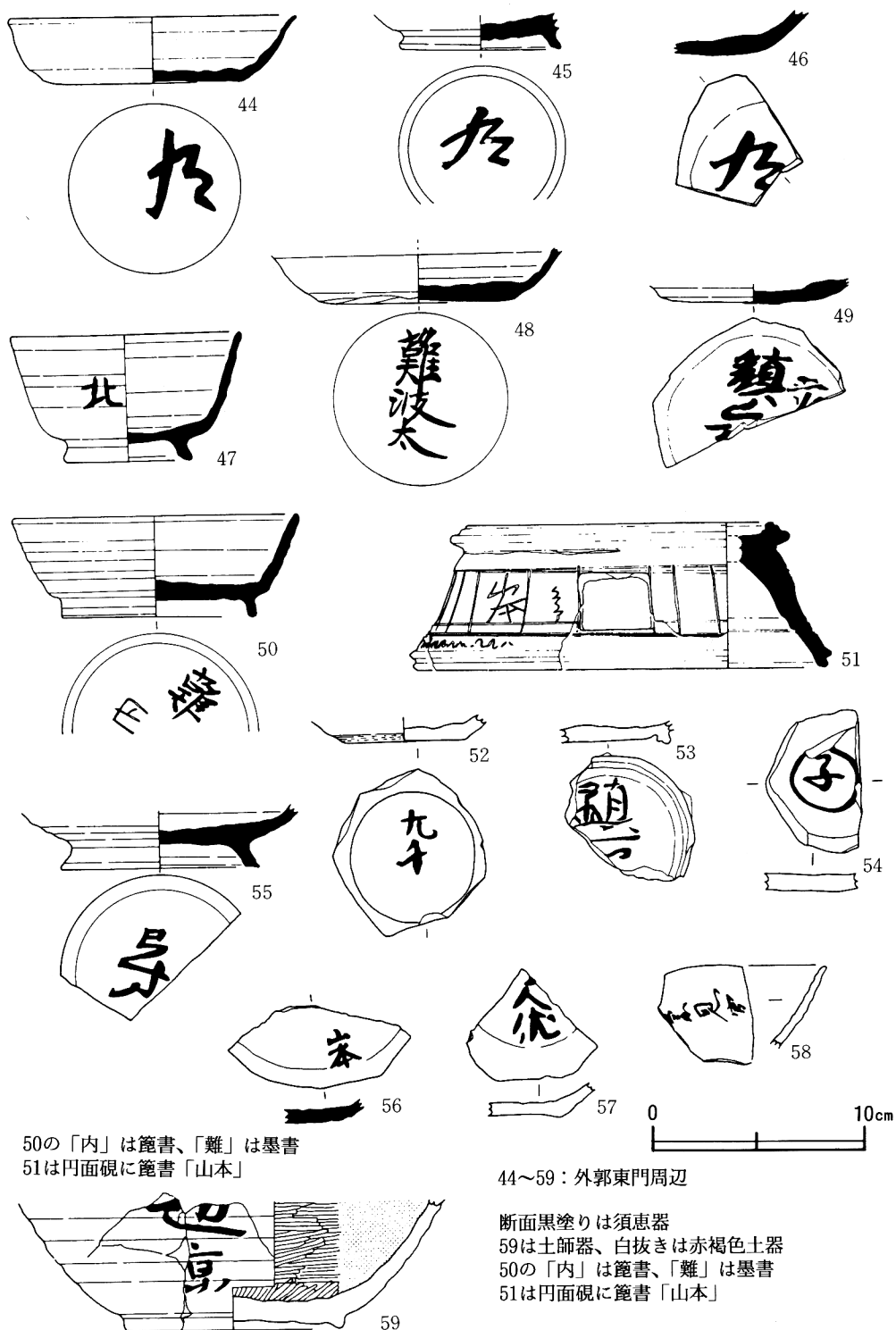
第11図 墨書土器等集成図(2) 米代川~八郎潟周辺の墨書・篋書土器



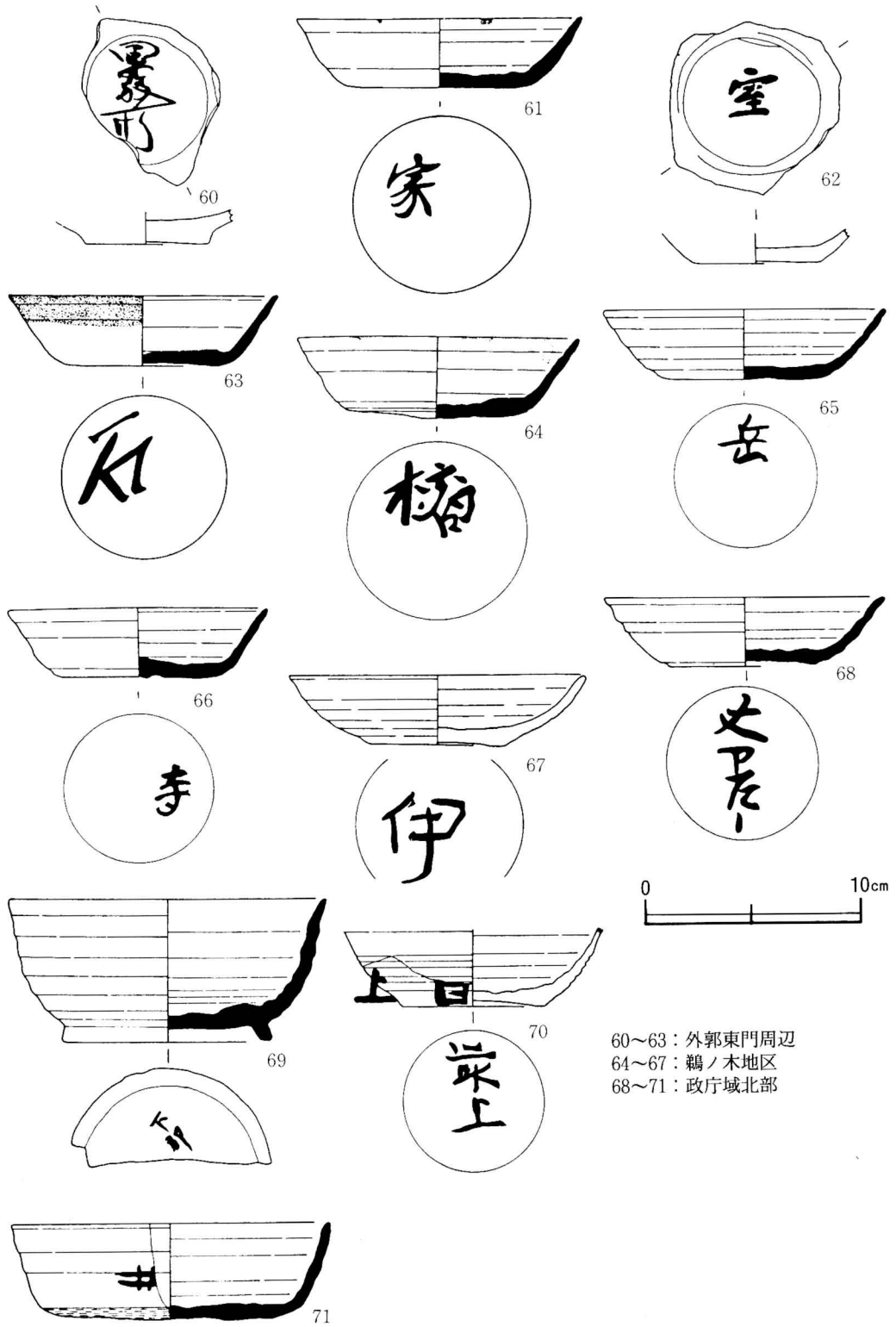
28・29：政庁域
30～34：外郭南辺
35～42：外郭東門周辺

※出土地点は文末の集成図掲載原典一覧を参照

第12図 墨書土器等集成図（3） 秋田城跡出土資料（1）

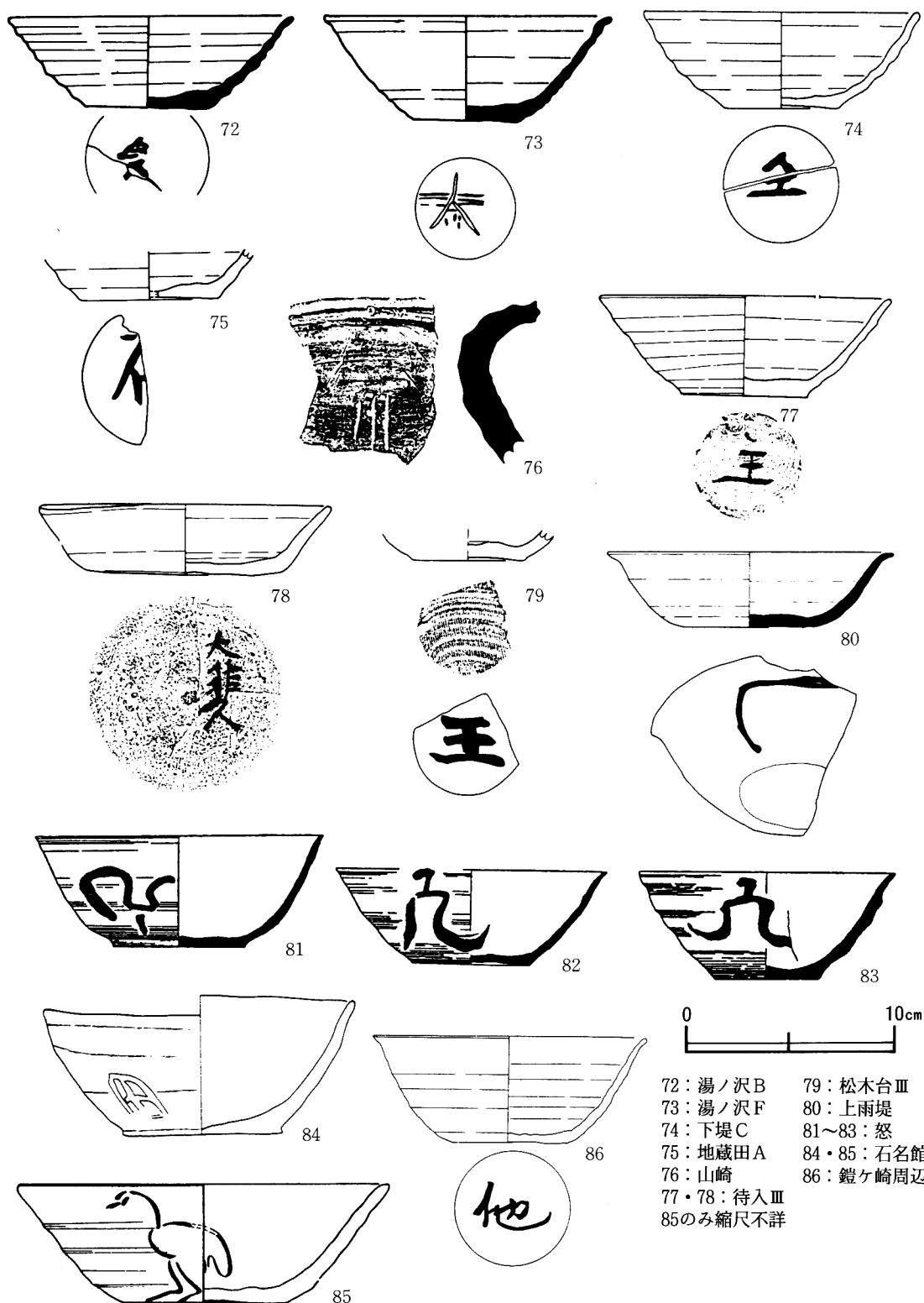


第13図 墨書土器等集成図(4) 秋田城跡出土資料(2)

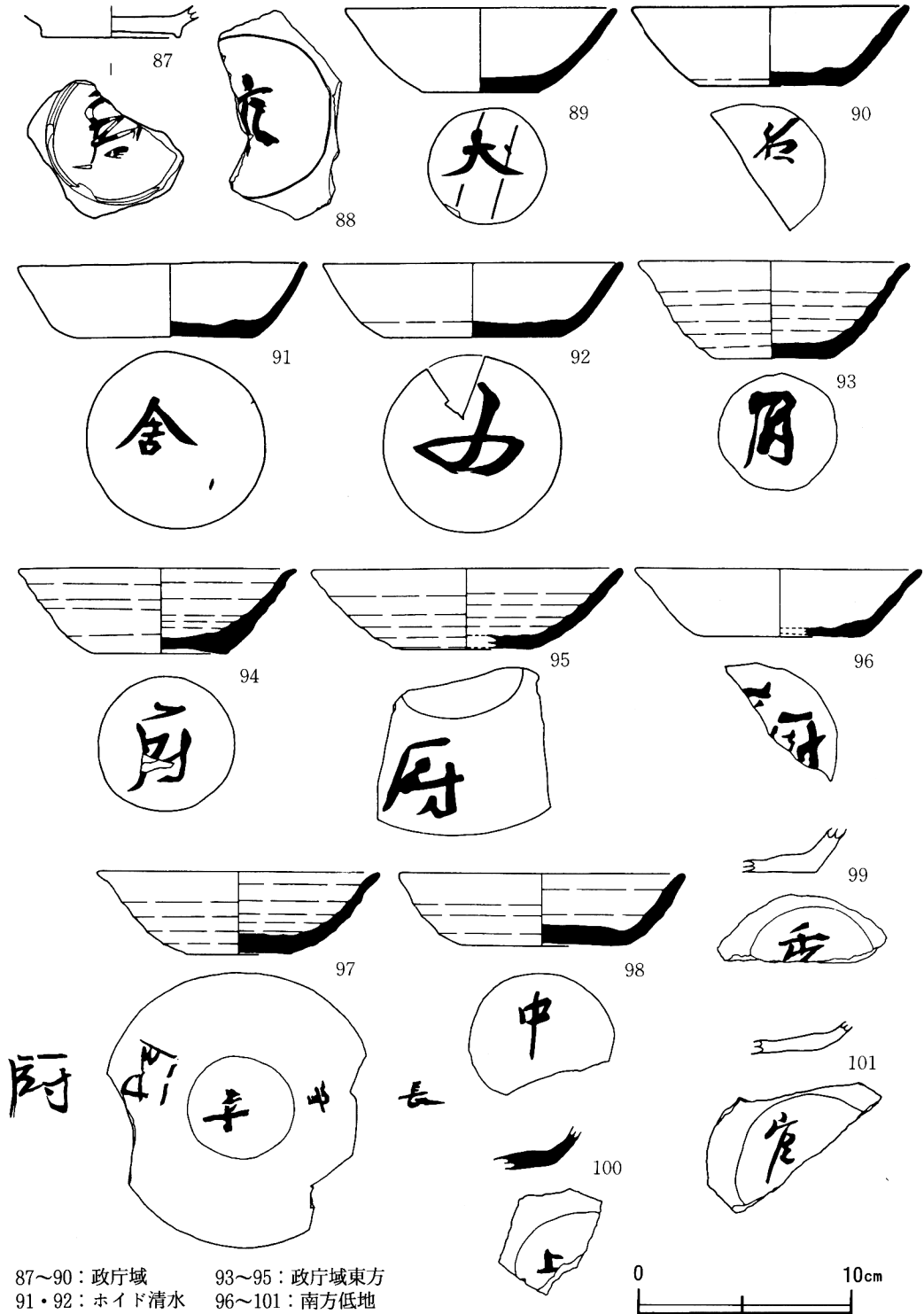


60~63：外郭東門周辺
64~67：鶴ノ木地区
68~71：政庁域北部

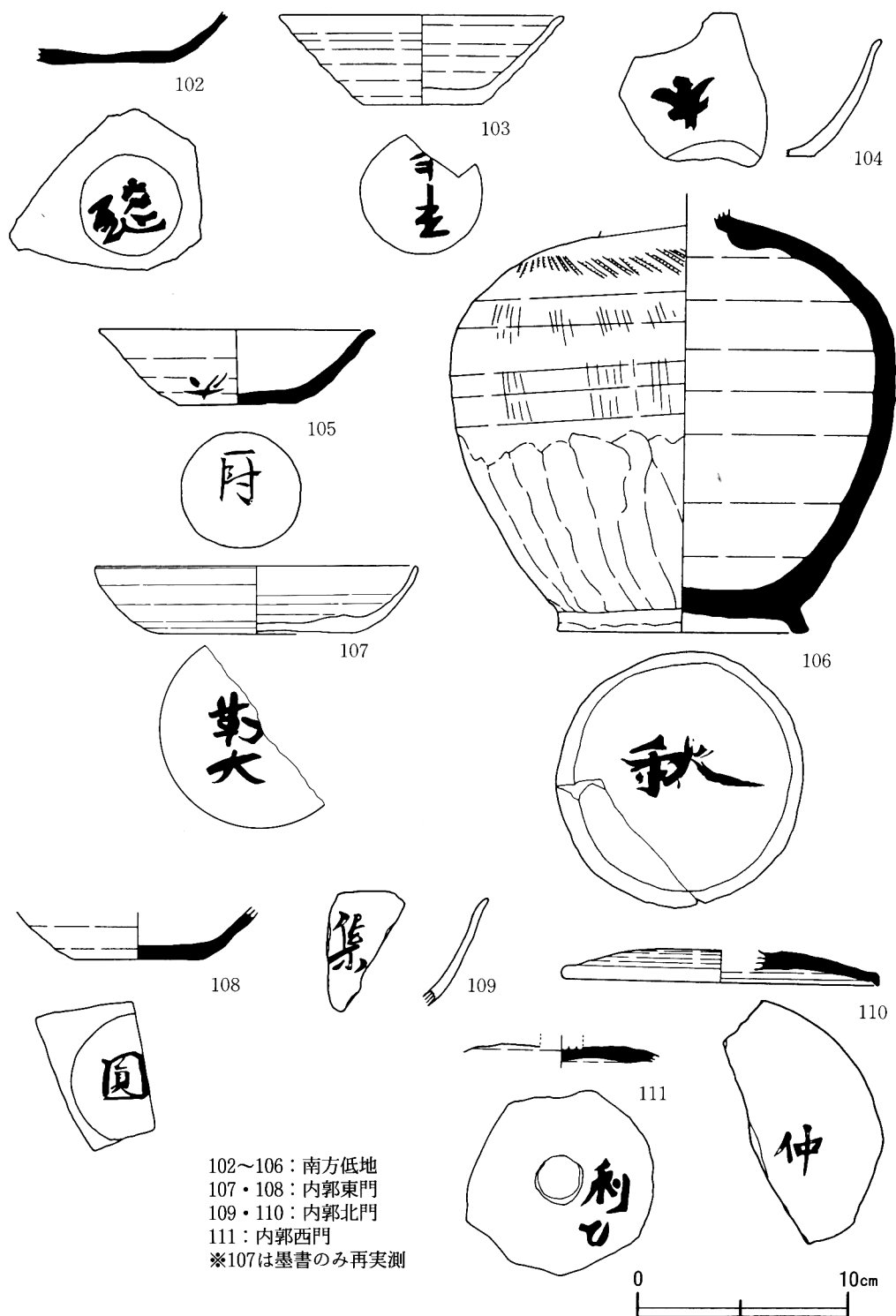
第14図 墨書土器等集成図（5） 秋田城跡出土資料（3）



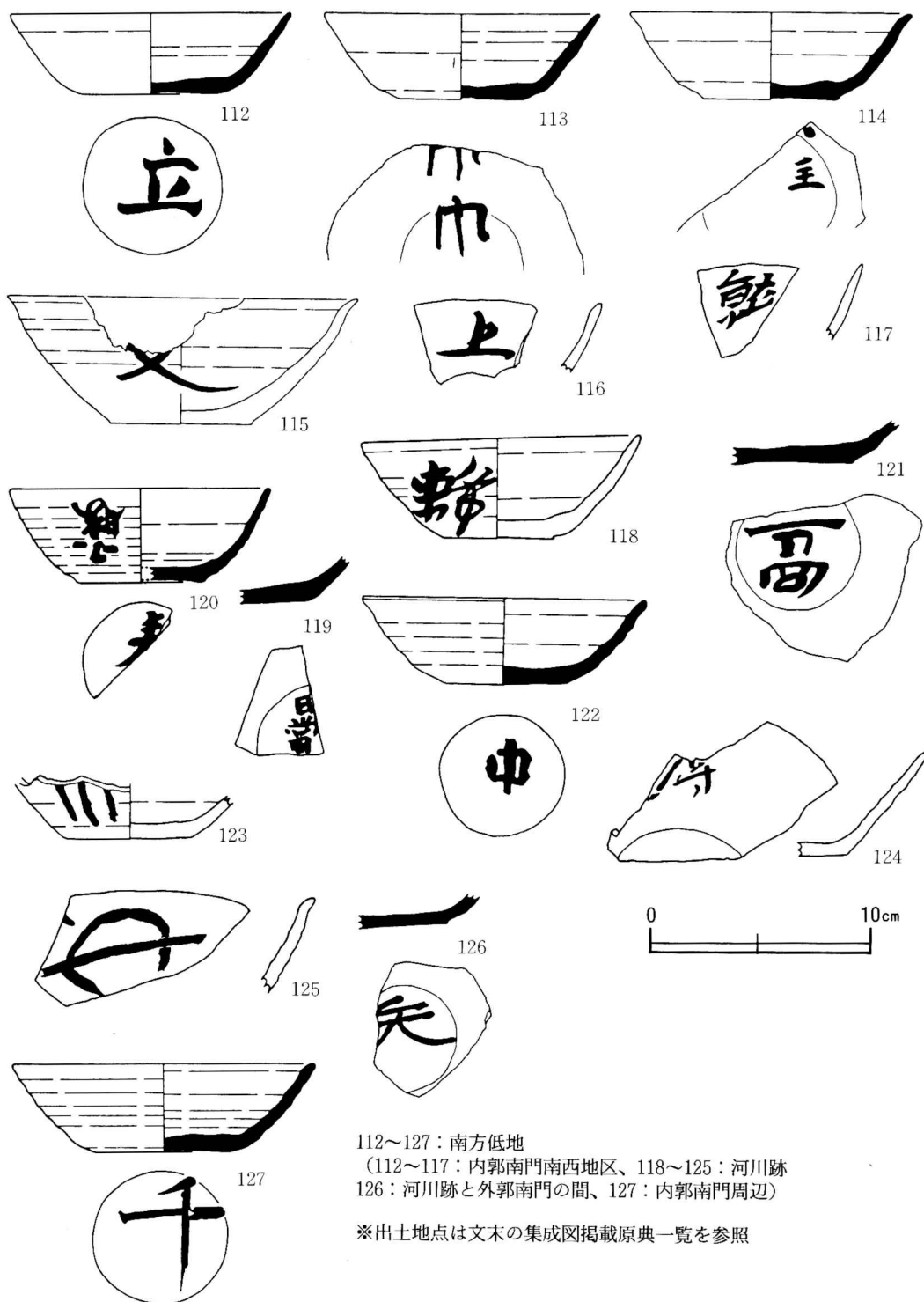
第15図 墨書土器等集成図(6) 雄物川下~中流域の墨書・篋書土器



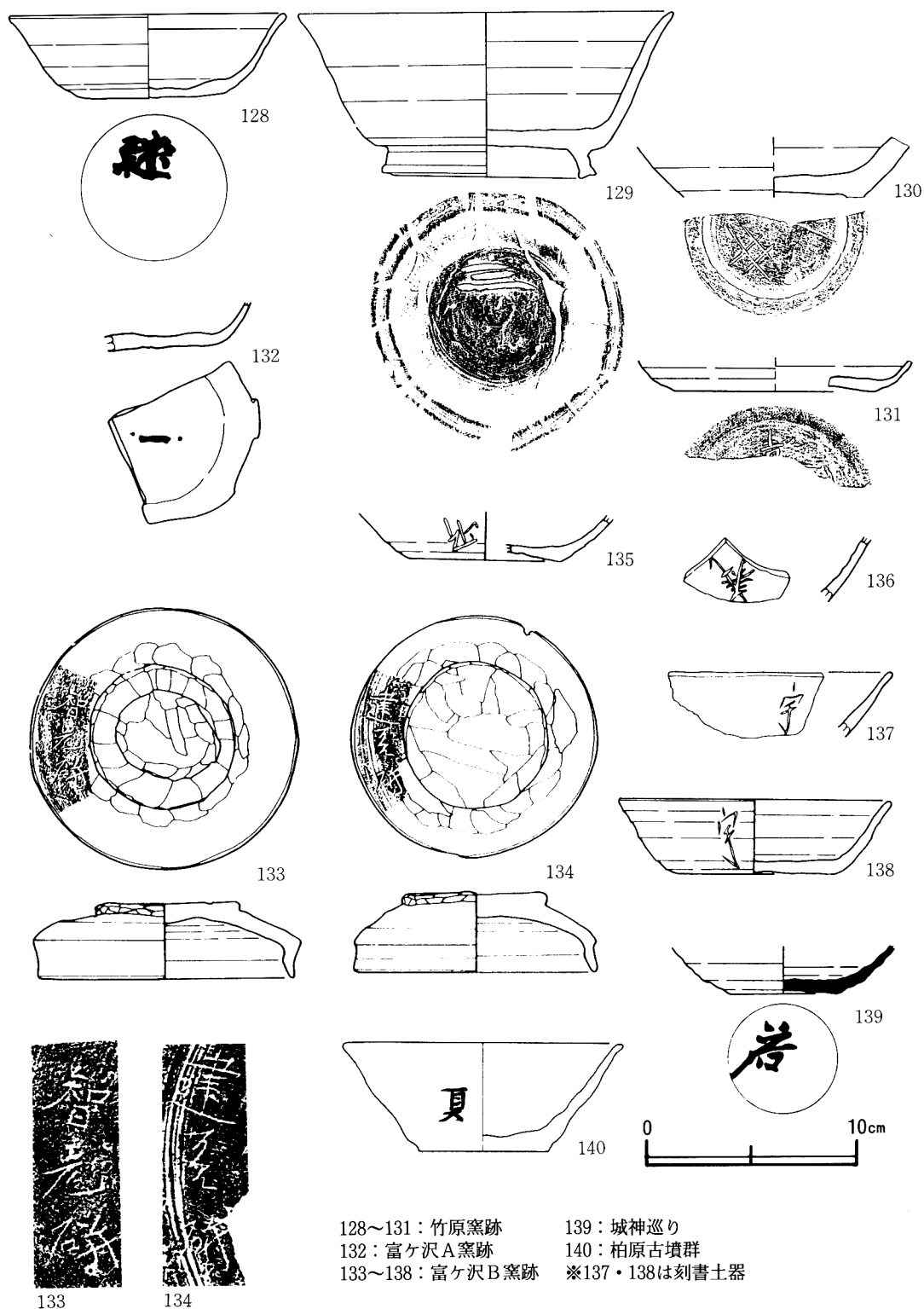
第16図 墨書土器等集成図(7) 払田柵跡出土資料(1)



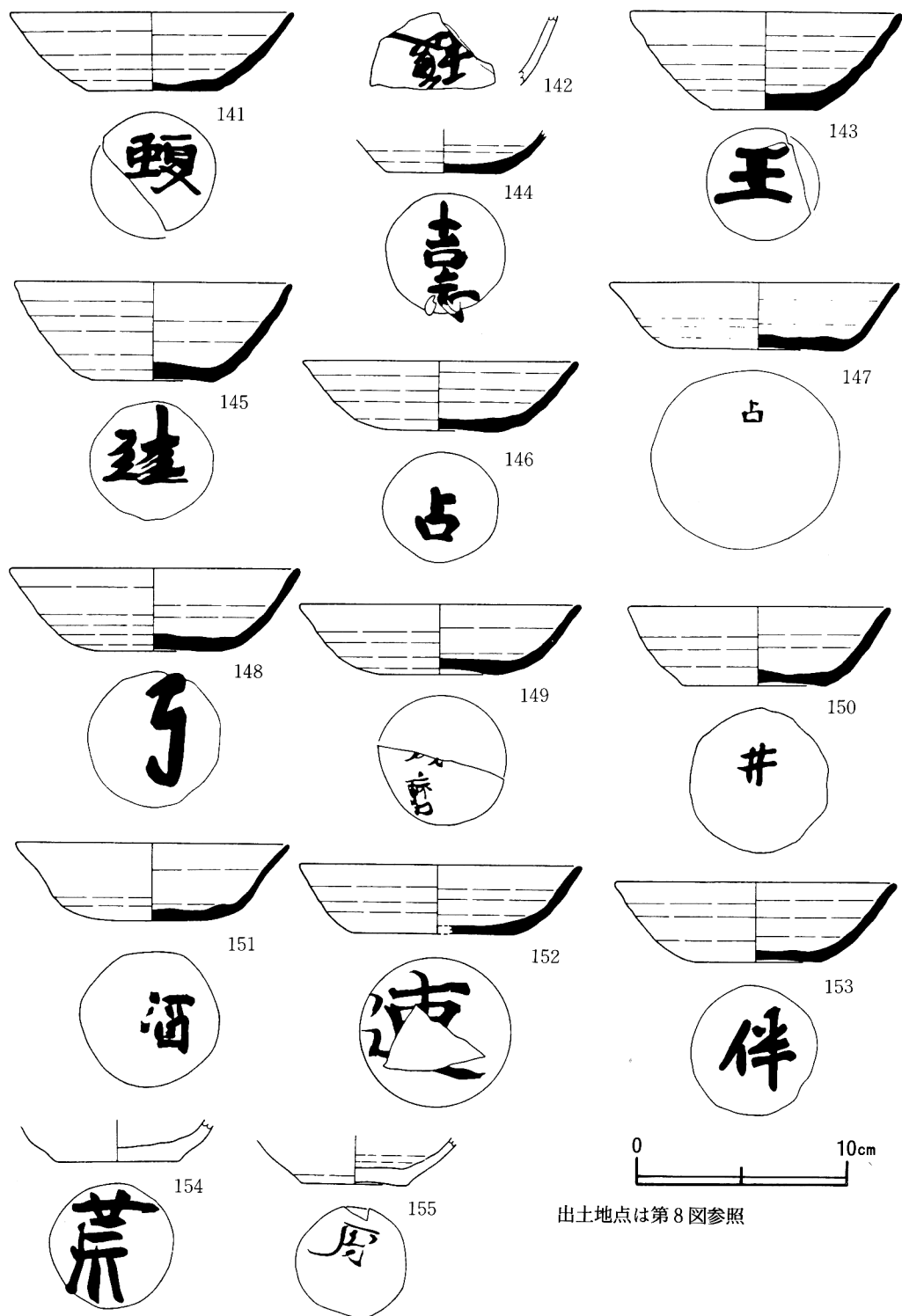
第17図 墨書土器等集成図(8) 払田柵跡出土資料(2)



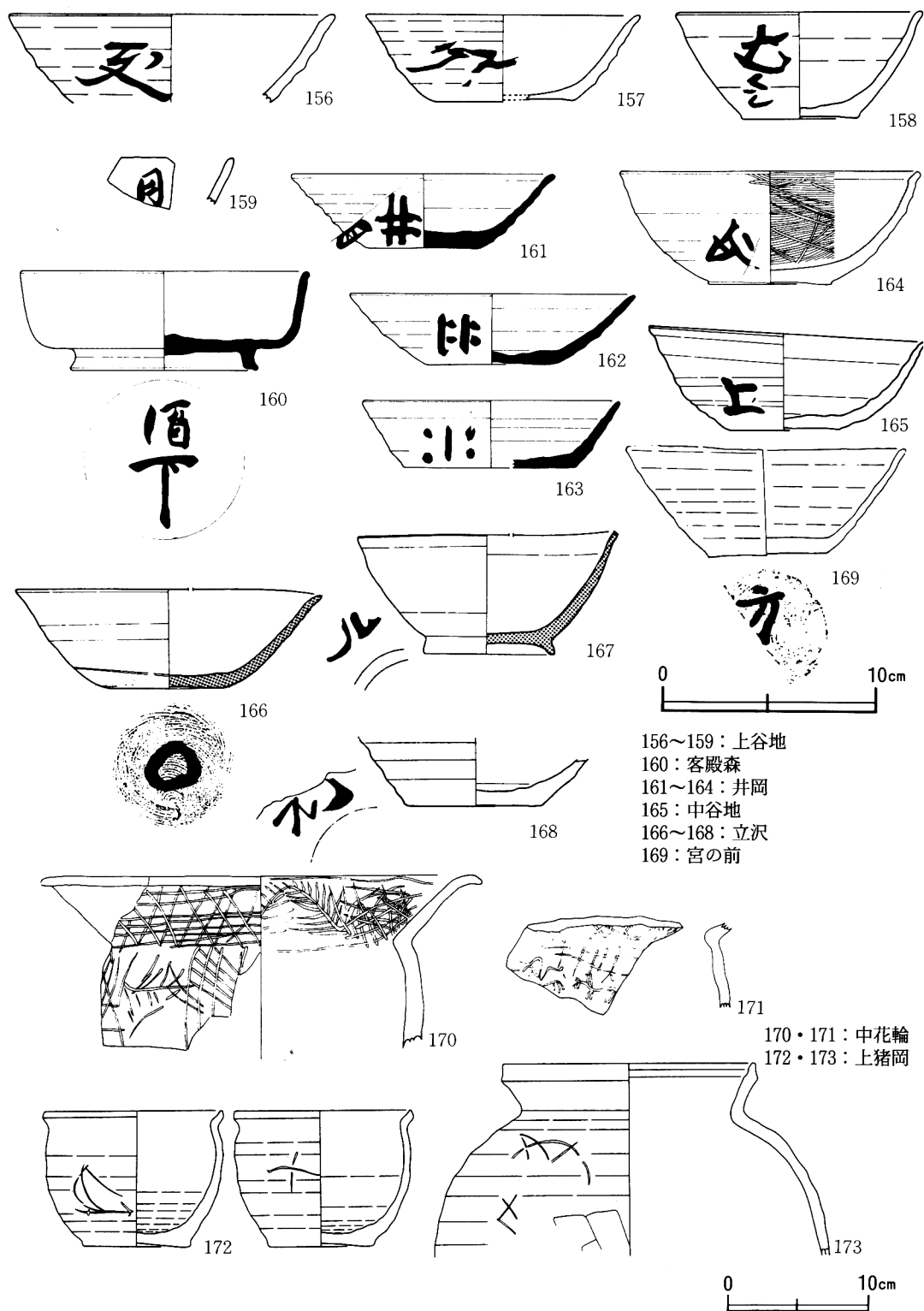
第18図 墨書土器等集成図(9) 弘田柵跡出土資料(3)



第19図 墨書土器等集成図(10) 雄物川中～上流域の墨書・範書土器



第20図 墨書土器等集成図(11) 手取清水遺跡の墨書土器



第21図 墨書土器等集成図 (12) 子吉川流域の墨書土器 (上)、絵画? (下)